日本学術会議第三部監修

日本における経済学史研究十年の歩み

——経済学史学会十年史——

経済学史学会編集

経済学史学会十年史刊行会

日本学術会議第三部監修

日本における経済学史研究十年の歩み

＜経済学史学会十年史＞

経済学史学会編集

経済学史学会十年史刊行会

感謝の言葉

経済学史学会が本書の出版を決定して以来、編集委員が最も重要視したのは、なによりもまず正確を期する、ということであった。これは本書の性質上当然のことであるが、しかし十年もたつと、はじめの頃の細かい史実を集めることは、必ずしも容易ではなかった。殊にはじめの頃は終戦後あまり年月を経ていなかったから、なおさら然りである。この困難を克服しえたのは、はじめから昭和三十三年まで本学会の事務所であった早稲田大学の会員諸兄の絶大な援助のおかげである。

次に、各大会での特殊の催し、例えば古書展観に際して展示された書物の目録などについては、当該当番校の会員諸兄の応援にまつところが大であった。

最後に、各支部からの情報を相当集めえたのは、支部幹事の方々のお骨折によるものである。

以上の外にもあると思うが、要するに、このような各方面からの助力がなかったならば、本書を編むことはできなかったであろうし、またできたとしてもそれは単なる、無味乾燥な、公式記録にすぎないものとなったであろう、という意味において、右の諸兄に対して深い感謝の意を表せざるをえないのである。

*　　*

なお、本書の出版に対して、日本学術会議から、出版費の過半の補助をうけたが、これは同会議が本書の学術

的価値を認めたためであって、感謝にたえない次第である。会員一同の喜びこれにすぎるものはないであろう。

さらに欲をいえば、各大会での研究報告者の報告要旨を加えたかったのであるが、これは近頃では日本経済学会連合のブレティンに載せることになっているし、また古いものを集めることは事実上困難でもあるので、割愛せざるをえなかった。

終りに、本書の出版に当って、各方面にわたって格別の配慮と奔走を惜しまれなかった有斐閣の岡村孝雄氏に厚くお礼申したい。

一九六一年三月二〇日

経済学史学会代表幹事

堀　経　夫

目　次

感謝の言葉
凡　例
はしがき……二
本学会創立までの事情……三
本学会正式成立の模様……一一
本学会十年の歩み……一九
一　学会規模の拡大……一九
二　学会の事業……二二
（附）警職法問題についての声明……七一
経済学史学会十年の歩みを顧みて……久保田明光……七三
経済学史学会の過去を思うて将来に及ぶ……堀　経夫……七四
附　録Ⅰ……七六
附　録Ⅱ　経済学古典書展示明細……七八
附　録Ⅲ　現在の会則、会員、役員、事務局……一一四

凡　例

一、本書は、「十年史」たるの性質上、原則として、昭和二五年四月から昭和三五年三月にいたる十年間を対象としている。

二、本書の編集委員は、久保田明光、堀経夫、大道安次郎、山川義雄、松田寛、久保芳和の六名であるが、主として執筆の任に当ったのは大道である。原稿の主要部分が出来上ったところで、これをコピーして各委員に配布しておき、一定期間を経過した後、さらに大道・山川・松田・久保の四名が会合して右の原稿を再検討し、補充訂正を行った。原稿の統一、資料の整備、校正などには主として久保が当った。

日本における経済学史研究十年の歩み

——経済学史学会十年史——

はしがき

経済学史学会は昭和三五年の春に創立十周年を迎えた。第一回の会員総会と大会が昭和二五年四月二二、二三の両日東京の早稲田大学において開かれ、正式に経済学史学会が発足したのであるが、毎年春秋二回東京と地方での総会と大会とを重ねて、昭和三五年の春東京の日本大学で開かれた第二一回の総会と大会において、創立十周年目を迎えたわけである。創立当初は僅か百名を少し超える程度の会員数であったのが、現在では五百名近くに増加し、また関東、関西、西南の各地に部会を持ち、東北部会も最近結成の動きがあるなど、本学会は堅実で順調な発展の道をたどっている。まことに同慶にたえない次第である。

本学会が十周年を迎えたのを機会に、その十年間の歩みを回顧し、記録しておくことは、本学会の今後の発展に資するためにも、また記録的資料を残すためにも、意義あることであろう。ここにささやかな形においてではあるが、経済学史学会十年史を編する次第である。

本学会創立までの事情

昭和二五年四月に本学会の創立総会と第一回大会が東京の早稲田大学において開かれたが、本学会創設への動きはすでにその前年の春頃からはじまっていた。戦時中に閉じ込められていた学問研究への自由な窓が、終戦とともに広く開かれたので、日本の学界の各分野においては再び活潑な動きを示し、さまざまな学会が相ついで復活したり、創設されはじめた。経済学説史や経済思想史の研究者の間にも独立した新しい学会を持とうとする気運が生じてきたことは当然であろう。昭和二四年の春頃から、早稲田大学の久保田明光教授と関西学院大学の堀経夫教授との間で本学会の創設のことが私的に取り交わされていたが、正式に取上げられたのは、昭和二四年一一月六日京都での両教授の会合においてであった。両氏の協議の結果、学会創設を積極的に推進することになり、そのためにはまず発企人として広く学界の有力者の参加を求めることが必要であるとして、それぞれ手分けしてその許諾を得ることにした。久保田教授は帰京後直ちに学界の長老である高橋誠一郎氏と懇談してその許諾を得、さらにその翌年（昭和二五年）一月一七日には一橋大学の大塚金之助教授を訪い、またその前日には東京大学の舞出長五郎教授に手紙にて、それぞれ発企人の承諾を求め、許諾を得た。関西では堀経夫教授が神戸大学の坂本弥三郎教授に発企人の承諾を求め、その快諾を得た。このようにして六名の発企人がまず結集したのである。そしてこれら六名の発企人連名でつぎのような勧誘状を関係の各方面に送った。その結果入会希望者約百名を得る

ことができた。

拝啓　益々御清栄の御事と御慶び申上げます。陳者今般私共相諮り、経済学史の研究の為めにお互いに協力して切磋琢磨する機会をもちたいと考えまして、茲に経済学史学会を創設いたすことになりました。御承知の様に、この分野におけるわが国の研究にも欧米のそれに比べて、必ずしも劣らぬものを見ることが出来る様になって参りましたが、この機会に同学の方々と協力して、更に一層その水準を高めたいと念願いたしておる次第であります。

つきましては私共のこの主旨に御賛成下さいまして、入会していただくことができますならば真に幸甚に存ずる次第です。

尚御手数乍ら同封の葉書にて賛否の御返事をいただきたいと存じます。目下学年末に近づき何かと御多忙の御事と存じますので、詳細な点につきましてはなるべく近い機会に第一回総会を開きまして、御協議していただく予定でおります。

敬具

昭和二十五年一月

右発企人（ＡＢＣ順）

堀　経　夫

久保田明光

舞出長五郎
大塚金之助
坂本弥三郎
高橋誠一郎

なお本学会の会則原案については、発企人の間で協議を重ねていたが、久保田発企人が原案を作成することになった。そしてその原案を中心に、昭和二五年四月二一日上野の国立博物館の高橋館長室で、久保田、高橋、堀、大河内（舞出発企人の代理）の四人が集って、大塚発企人の書面での修正意見をも加味しながら協議の結果、第一回会員総会に提出すべき会則案を作成した。この原案は一、二の字句の修正のみで第一回会員総会で可決された。その原案をつぎに掲げておこう。

経済学史学会会則

（名　　称）

第一条　本会は経済学史学会と称する

（目　　的）

第二条　本会の目的は左の通りである。

一　経済学史、経済思想史の研究
二　内外の学界との交流

（事　業）

第三条　本会は前条の目的を達するために左の事業を行う

一　研究報告会の開催
　イ　毎年一回適当の地及び時に全国大会を開く
　　必要に応じて臨時の大会を開くことがある
　ロ　別に定めるところによって地方部会を開くことができる
二　公開講演会の開催
三　内外の経済学諸学会との連絡
四　機関誌の発行
五　その他本会の目的を達するために必要な事業

（会　員）

第四条　本会は経済学史、経済思想史の研究者をもって組織する

第五条　本会に入会しようとする者は会員二名の紹介により常任幹事に申込み総会の承認を受けなければならない

第六条　会員は会費として毎年四月（五月以後に入会した者は入会の時）に弐百円を納めなければならない

第七条　会員は機関誌の実費配布をうける

第八条　会員は書面により常任幹事に通告すれば退会することができる

（顧　問）

第九条　会員であって多年経済学史学の発達に貢献のあったものは幹事会の推薦により総会の承認を経て顧問とすることができる

（役　員）

第十条　会務を処理するために幹事若干名を置く

第十一条　幹事は会員総会において会員中より選挙する

第十二条　幹事の任期は二ケ年とする。但重任を妨げない

第十三条　本会の常務を処理するために幹事中より常任幹事若干名を互選する

第十四条　常任幹事の中一名を本会の代表者とし代表幹事と称する

（総　会）

第十五条　本会は毎年一回会員総会を開く

幹事会が必要と認める時又は会員の三分の二以上の請求がある時は臨時総会を開く

第十六条　幹事会は総会の議事、会場及時期を定め予めこれを会員に通知する

第十七条　常任幹事は総会において会務及び会計の報告をする

第十八条　総会における議長はその都度会員中より選挙する

第十九条　総会における決定は本会則において特に定めてある場合のほか出席会員の過半数による。可否同数の場合は議長がこれを決定する

（会則の変更及び本会の解散）

第二十条　本会則の変更又は本会の解散は幹事の過半数又は会員十五名以上の提案により総会出席会員三分の二以上の賛成を得なければならない

（会計期間）

第二一条　本会の会計期間は毎年四月一日より翌年三月三十一日までとする

（附　則）

第二二条　幹事の中二名を日本経済学会連合の評議員とし会員総会においてこれを決定する。但緊急已むを得ない場合はこの限りではない

第二三条　本会の事務所は当分の間　　内に置く

この会則において注目すべきことは、これまでの多くの学会の会則では、会務を処理する役員を「理事」としているのを幹事という名称を用い、また「会長」という名称を避けて「代表幹事」という名称を採用している

とである。役員はもちろん会員総会において会員中より選挙によって選出される。名は体を現わすといわれているが、このように厳めしい響のある「理事」の名を避けて「幹事」の名を採用したことは、本学会の運営を出来るだけ民主主義的に行おうとする精神の一つの現われといえる。この尊い精神は現在でも生きている。

この会則と現行のそれとを比べてみると、全体として殆んど変更が見られない。ただつぎの諸点について附加・変更があるだけである。

一　第二条第一項および第四条の「経済学史、経済思想史の……」を「経済学史、社会・経済思想史の……」と変更されたこと。

二　第六条の会費弐百円が参百円に変更されたこと。

三　「役員」の項で新たに「監事」を設けることになり、そのために第十四条のつぎに第十五条として監事についての規定を設けて挿入したこと、このために会則が全体として二十三条よりなっていたのが、二十四条となった。

四　附則の学会の事務所は、第一回会員総会の幹事会において代表幹事に久保田明光教授が互選されたので、「早稲田大学政治経済学部研究室」となっていたが、その後代表幹事が堀経夫教授となったので、「関西学院大学経済学部内」と変ったこと。

なお附記すべきことは、会則の第三条で、毎年一回の全国大会を開催し、必要に応じて臨時の大会を開くことがあると規定しているが、実際は毎年春秋二回開いている。これは第一回の会員総会において、その秋に京都で

臨時大会を開くことを決定したことが、それ以後の慣例となって現在まで続いているわけである。このように年二回全国大会を持っているということは、多くの学会でも稀な例外に属するといえよう。これは本学会の会員の総意が本学会を支持し、協力していることの一つの現われといえる。

以上が本学会創立までの事情の概略であるが、ここで本学会と日本経済学会連合との関係について一言しておこう。本学会が正式に成立する以前の昭和二五年一月二二日に東京で日本経済学会連合が創立されたが、その機会に久保田発企人の骨折によって、この連合にオリジナル・メンバーとして本学会の加入が認められた。しかしまだ第一回会員総会を開いて正式に本学会の成立を見ていないので、発企人において協議の結果、同連合規定による参加学会より出すべき評議員を、暫定的に一橋大学の大塚発企人、関西学院大学の堀発企人と決め、両発企人は同連合の創立総会に出席した。（本学会第一回会員総会において、同連合に参加の件、同連合への評議員の件は承認された。）このように本学会が正式に成立する以前においてすでに日本の経済学界に市民権を獲得することが出来たことは、本学会のその後の歩みに明るい光を投げかけるとともに、実質的な面でも大きなプラスとなったことを見逃してはならない。本学会成立以前にこのような配慮をされた発企人の処置は、本学会の名において高く評価すべきであろう。

本学会正式成立の模様

本学会創立については、以上述べてきたような周到な準備と用意があった。そしていよいよその第一回会員総会と大会が昭和二五年四月二二、二三の両日にわたって、東京の早稲田大学の政治経済学部校舎において開かれることになった。そのために四月一二日つぎのような往復はがきの案内状が、経済学史学会発企人の名において、入会申込者（一一三名）に発送された。

経済学史学会を左記によって開催いたします。万障御繰合せの上御出席下さい。追而御出席の有無を別紙返信により御回報下さい。

経済学史学会発企人

日　時　第一日　四月二十二日（土）　午前十時　会　員　総　会
　　同　　午後一時　研　究　報　告
　　第二日　四月二十三日（日）　午前十時　研　究　報　告
　　午後一時　研　究　報　告
　　午後四時半　会　員　懇　親　会

会　場　早稲田大学三号館政治経済学部校舎（新宿区戸塚一丁目、都電早稲田下車、都バス新宿駅西

口より早稲田行終点）

研究報告　リカアドオの分配論について　堀　経　夫

重商主義と近世国家の成立―歴史派的重商主義観の批判　白杉庄一郎

「経済表」の現代的意義　越村信三郎

題　未　定　杉山清

尚　一橋大学、東京大学、東北大学各一名交渉中

そして返信用には、東京都新宿区戸塚町一丁目早稲田大学政治経済学部研究室久保田明光行とプリントされている。

かくて第一回会員総会及び大会は、予定通り四月二二、二三の両日早稲田大学政治経済学部の校舎で行われた。まず二二日午前十時より会員総会が持たれたが、その次第はつぎの通りであつた。

開会の辞　堀経夫発企人

座長選挙　高橋誠一郎発企人に決定

座長挨拶　同　上

発企人代表挨拶並に経過報告　久保田明光発企人

会則審議　同　上

会則は一、二の字句の修正のみで原案通り可決。

役員選挙

発企人一任となる。発企人会を昼食時に開き、後記のように決め、午後の研究報告会に先立って会員総会を開き承認された。さらに幹事会を開き、常任幹事、代表幹事を決定。

閉会の辞　大塚金之助発企人

（なおこの総会において、日本経済学連合の評議員として大塚、堀両発企人を送ったことが承認された）

また役員はつぎの通り決った。

幹事（ABC順）

堀　経夫（関西学院大学）
岸本誠二郎（京都大学）
久保田明光（早稲田大学）
舞出長五郎（東京大学）
野村兼太郎（慶応義塾大学）
大塚金之助（一橋大学）
坂本弥三郎（神戸大学）

常任幹事

堀　経　夫
久保田明光
舞出長五郎

代表幹事

久保田明光（このために会則第二十三条による本会事務所は当分の間早稲田大学政治経済学部久保田研究室と決定）

なお顧問として高橋誠一郎氏を会則第九条の規定に従って推薦することを第一日の幹事会で決定し、午後の研究報告会の間に会員総会を開いて承認されたが、同時に上記の常任幹事、代表幹事の件も承認された。

さらにこの総会においてつぎの二件も承認。

一　臨時大会の件　本年の秋に京都において臨時大会を開くこと。

二　会員勧誘の件　第一回大会までに会員を各方面から獲得するよう努めたが、なお連絡不充分などのためP・Rがゆきとどいているとはいえない。そのため各大学・機関に属する会員より常任幹事まで入会希望者を至急通知されるように要望し、これらの入会希望者は会則第四条の規定の該当者であれば、今回に限り会則第五条の規定にかかわりなく本会のオリジナル・メンバーとして取扱う旨を総会にはかり了解を得た。

研究報告は予定通り、第一日の午後と第二日の午前と午後にわたって行われた。予告した報告者の他に東大の隅谷三喜男氏、東北大の玉野井芳郎氏の報告もあった。その題目については別の場所で記することにしたい。

第二日の午後五時半から会員懇親会を同じ会場で開いた。出席会員はつぎの通り。（順序不同）

高垣、岸本、大道、小松(芳)、木村、山川、小松(雅)、松枝、久保、相見、堀家、伊達、久保田(明)、久保田(高)、岡山、堀川、堀、大河内、白杉、杉山、高島、越村、大塚、以上二三名。（なおこの他に会場整理のために手伝った早大大学院学生田中氏が参加）

かくて二日間にわたる第一回会員総会及び大会が無事終了し、経済学史学会は正式に発足したのである。第一日の出席会員は四二名（他に藤塚、松川両氏傍聴）、第二日は二九名（他に松川氏傍聴）であった。

本学会のオリジナル・メンバーは、第一回会員総会までに入会を申込んだ会員一一三名の他に、さきの総会での申合せによる新入会員一〇名を合せて、合計一二三名である。つぎにそのオリジナル・メンバーの氏名を掲げておこう。

経済学史学会々員名簿

昭和二十五年四月十三日現在（ABC順敬称略）

	氏名	所属		氏名	所属
A	相見志郎	同志社大学経済学部		浅井喜久雄	石川師範学校
	相沢秀一	山口大学経済学部		遊部久蔵	慶応義塾大学経済学部
	赤羽豊次郎	信州大学文理学部		東晋太郎	関西学院大学経済学部
	青山秀夫	京都大学経済学部	C	長守善	中央大学経済学部

D

大道安次郎　関西学院大学文学部
伊達邦春　早稲田大学政経学部
出口勇蔵　京都大学経済学部

F

福原行三　大阪府立浪速大学
古谷弘　東京大学経済学部

H

平井俊彦　京都大学経済学部
菱山泉　京都大学経済学部
堀経夫　関西学院大学経済学部
堀川マリ子　早稲田大学政経学部
堀家文吉郎　早稲田大学政経学部
穂積文雄　京都大学経済学部

I

伊部政一　紅陵大学
石原忠男　中央大学高等部
井藤半弥　一橋大学

K

川口慎二　大阪大学法経学部
川尻武　中央大学高等部
木村正身　香川大学経済学部
木村健康　東京大学経済学部
木村元一　一橋大学
岸本誠二郎　京都大学経済学部
北沢新次郎　早稲田大学商学部
小林昇　福島大学
児玉洋一　香川大学経済学部
小松雅雄　早稲田大学政経学部
小松芳喬　早稲田大学政経学部
越村信三郎　横浜国立大学
小谷義次　大阪市立大学経済学部
久保芳和　大阪市立大学経済学部
久保田明光　早稲田大学政経学部
久保田高明　三菱経済研究所
久留島陽三　東京大学経済学部
舞出長五郎　東京大学経済学部

M

丸田永作　香川大学経済学部
正木一夫　金沢大学法文学部
増井光蔵　大分大学
松田勇　大手前高等学校
松田弘三　京都大学経済学部
松枝寅男　香川大学経済学部
松尾博　京都大学経済学部
松浦要　中央大学高等部

三谷友吉　関西大学経済学部
宮本義男　長崎大学経済学部
溝川喜一　京都大学経済学部
水田洋　名古屋大学
森耕二郎　九州大学経済学部
森島通夫　京都大学経済学部
武藤光朗　国学院大学政経学部

N

永田清　慶応義塾大学
中村忠一　京都大学経済学部
縄田栄次郎　関西学院大学高商部
西川清治　大阪市立大学経済学部
西村孝夫　広島大学政経学部（予定）
野村兼太郎　慶応義塾大学

O

大石泰彦　東京大学経済学部
大泉行雄　香川大学経済学部
岡本博之　大阪市立大学経済学部
岡山隆　早稲田大学人文科学研究所
大河内一男　東京大学経済学部
大前朔郎　関西学院大学経済学部
大野精三郎　一橋大学経済研究所

小野高治　同志社大学経済学部
大塚金之助　一橋大学

S

酒枝義旗　早稲田大学政経学部
坂本弥三郎　神戸大学経済学部
坂田太郎　山口大学
沢村栄治　関西大学経済学部
重松通直　大分大学経済学部
島崎晴哉　中央大学経済学部
島津亮二　京都大学経済学部
新川士郎　北海道大学法文学部
白杉庄一郎　滋賀大学経済学部
末永茂喜　教育大学
杉原四郎　関西大学経済学部
杉本栄一　一橋大学
杉山清　早稲田大学政経学部
住谷悦治　同志社大学経済学部
隅谷三喜男　東京大学経済学部
鈴木鴻一郎　東京大学社会科学研究所
鈴木憲久　紅陵大学
高垣寅次郎　紅陵大学

高木暢哉　九州大学経済学部
高木真助　山口大学経済学部
高木康雄　香川大学経済学部
高橋誠一郎　慶応義塾大学
高島善哉　一橋大学
武田正二　中央大学経済学部
玉野井芳郎　東北大学経済学部
田添京二　東京大学経済学部
田村秀夫　中央大学経済学部
田中真晴　京都大学経済学部
館竜一郎　東京大学経済学部
筒井清彦　大分大学学芸学部

U

内田一男　京都大学経済学部
内田義彦　専修大学
上田辰之助　一橋大学
梅田政勝　大分大学経済学部
梅谷泰夫　慶応義塾大学経済学部

Y

八木助市　神戸大学経済学部
矢口孝次郎　関西大学経済学部
山田秀雄　一橋大学経済研究所
山田雄三　一橋大学
山川義雄　早稲田大学政治経済学部
余田博通　広島大学政経学部（予定）
横山正彦　東京大学経済学部
行沢健三　関西学院大学経済学部

なお、創立総会の申合せによってつぎの十名がオリジナル・メンバーに加えられた。

平田清明　横浜国立大学
平館利雄　横浜国立大学
小池基之　慶応義塾大学
河本博介　長崎大学
武藤正平　横浜国立大学
守屋典郎
長洲一二　横浜国立大学
徳増栄太郎　横浜国立大学
寺尾琢磨　慶応義塾大学
吉川要　東京経済大学

本学会十年の歩み

昭和二五年四月に発足した経済学史学会は昭和三五年の春に十周年を迎えたわけであるが、この十年間にどんな歩みをしたかを、若干の項目を中心にその跡を辿ってみよう。

一　学会規模の拡大

学会の規模は何よりもその基盤となっている会員の質と数によって測られる。本学会の会員の質は会則第四条と第五条の規定に基づいているところから見て、高い水準を保っている。だから問題は数の点である。幸にして量の点においても順調な増加の傾向を示している。オリジナル・メンバーは、さきに示したように一二三名であったが、現在では会員は五百名を超えている。この十年間の増加の傾向をつぎに示しておこう。

（第一回大会より第二十回大会まで）

第一回大会	一二三名	第二回大会	一二七名
第三回〃	一四二	第四回〃	一五二
第五回〃	一七五	第六回〃	二〇九

第七回大会	二五四名	第八回大会	二七三名
第九回〃	二九七	第十回〃	三一四
第十一回〃	三三五	第十二回〃	三四九
第十三回〃	三六四	第十四回〃	三八三
第十五回〃	四〇三	第十六回〃	四一三
第十七回〃	四三九	第十八回〃	四五六
第十九回〃	四四五	第二十回〃	四八二

この十年間に会員のうち逝去された方々はつぎの諸氏である。吉川要、杉本栄一、上田辰之助、園田実、古谷弘、永田清、杉山清、五百旗頭真治郎、小川一の諸氏。いずれの方も本学会にとって貴重な会員であった。謹んで弔意を表する次第である。わけても吉川、杉本、上田、古谷、永田、杉山の諸氏はオリジナル・メンバーであった。杉山清氏は第一回大会で研究報告をされており、上田辰之助氏は本学会の監事をされ、また研究報告を二回もされている。

なお退会者は、森島通夫、高木康雄、安達新十郎、福井活郎、渡辺国広の五氏である。また会費滞納が五カ年以上に達した場合は、事務処理上、自然退会として取扱う旨の申し合わせが第十七回大会でなされ、現在（昭和三十五年三月三十一日）までに三十四名の自然退会者が出ている。

このように会員数は逐年増加の傾向を示したことは、本学会の堅実な発展を意味しているが、他方において地

方部会が全国の主なる地方に設けられたことも見逃してはならない。いちはやく関東部会と関西部会が設けられたが、数年前には西南部会が設けられ、また近く東北部会も設置される筈である。このように全国の主要な地方に地方部会を持っていることは、本学会が全国的な堅い基盤の上に立っていることを意味している。このことは本学会の規模の拡大という点からだけではなく、その基盤が全国的規模において整備していることをも語っているといえよう。

ところで幹事は第一回大会の際に選任された方々が、第九回大会の改選まで重任した。「幹事の任期は二ケ年とする。但し重任を妨げない」と会則にあるが、二期引きつづいて重任したわけである。

ところが第九回大会の役員改選期にあたって幹事増員の件が考慮されるにいたった。これは会員数がすでに三百名近くに増加したこと、本学会の全国的組織をさらに強化、整備せんがためであった。そこで幹事会案としては、会則を変更し、幹事を二〇名とし、常任幹事を七名とし、新たに監事二名をおくという案で総会に提出された。問題はその選出方法にあった。この点についての幹事会案は、一般投票によらないで、関東部会幹事四名、関西部会幹事二名、役員でない会員二名計八名の選考委員によって役員を選考し、総会で承認を求めるという案であった。このような案が総会に提出されたが、総会では役員数を二〇名にすることについては異議がなかったが、選出方法についてかなり論議が重ねられた、たとえば、一、現幹事八名は重任、残りの一二名について一般投票を行うこと、二、二〇名全部を一般選挙によって選出する案など。結局挙手によるヴォートによってさきの幹事会案が少数の差で承認された。しかし幹事会としては、少数の差で幹事会案が承認されたことを反省して、

むしろ一般投票によって選出すべきであるとして、役員改選を一般投票によることにしたのである。

その結果、附録Ⅰ（巻末）のような役員の変遷をみている。

以上がこの十年間の本学会の発展の概要である。このように学会の運営がスムースに行われ且つ順調な発展を示しているのはひとえに会員諸氏の協力と役員の御苦労とによるものといえる。ただ本学会の全国的規模をさらに組織的に強化・整備するために、現実に即した、より妥当な役員選出方法が考えらるべきであるとの意見が会員の間に起っているが、まだその議はまとまっていない。また経済学史学会に寄与された学界の先輩の処遇についても、この際考慮すべきであるとの意見も若干出ている。

二　学会の事業

本学会の会則第三条に、経済学史、経済思想史の研究、内外の学界との交流という目的を達成するために、つぎのような事業を行うことを規定している。

一　研究報告会の開催

イ　毎年一回適当の地及び時に全国大会を開く。必要に応じて臨時の大会を開くことがある

ロ　別に定めるところによって地方部会を開くことができる

二　公開講演会の開催

三　内外の経済学諸学会との連絡

四　機関誌の発行

五　その他本会の目的を達するために必要な事業

この十年間に本学会が行ってきた事業はこの規定の線に沿って着実な成果を収めつつある。その主なるものについて述べてみよう。

Ⅰ　研究報告会

本学会は毎年春秋二回の大会を開いている。だから十周年を迎えた本年春の日本大学での大会は第二一回目の大会にあたるわけである。本学会の会則の規定によると、大会は年一回開けばよいことになっている。それを敢えて年二回開くようになったのは、さきにも述べたように、第一回の大会の際に、その秋に臨時大会を京都で開いてはどうかとの総会の申合せがあって、臨時大会を京大で開いたことがその後の慣しとなって、毎年二回開くようになり、現在まで続いているのである。そして何時の間にか臨時大会という感じが会員になくなり、定期大会のように受取られるようになった。このように毎年二回の大会をもつことは会員にとってかなり負担とも思われるにも拘らず、そうした負担を負担とも感ぜずに現在まで盛大な大会が続けてもたれていることは、第一回大会で臨時大会を会員の総意によって申合せた熱意が、現在まで生きているということ、また現在の会員の本学会への積極的協力と支持があるからであるといえる。

ところで本学会の大会は会員総会と研究報告会の二つに分かれて行われている。会員総会を第一日の午前に、

研究報告は第一日の午後と第二日の午前、午後に行われ、懇親会は第一日の夕方に持たれるのが、これまでの慣行である。まずここでは主として研究報告会に焦点を合わして、第一回から第二〇回までの歩みを述べてみたい。

本学会の研究報告は原則として二日間に亘って行われている。このことは日本の多くの学会においてもかなり行われていることとて、そう珍しいことではない。ただ年二回このような研究報告会が全国的規模において行われているということは、かなり珍らしいことといえよう。強いていえば、これは本学会の特色の一つといえよう。さらに特色がある。それは研究報告者の数をかなり限定して少くしていることである。報告時間を四〇分、討議質問の時間を二〇分として、一つの研究報告に一時間を費すのを原則としている。これを他の多くの学会の約三〇分平均のそれと比べると格段の相違がある。これは研究報告者に出来るだけ時間を与えて、提出した問題を相互に深く掘り下げたいという趣旨から出ているのである。また研究報告者数を限定していることは、他の学会に見られるようないくつもの部会に分けなくて、会員全部が出席して討議と質問に参加する機会をつくろうという考えから出発している。このことも本学会の特色の一つ（第二の特色）といえよう。

ところで本学会の研究報告会は第四回大会以後「共通論題」と「自由論題」に分かれて行われるようになった。それまでは自由論題の形式で研究報告者が各自の研究発表のテエマを選んで行っていたのを、第四回大会以後は、一方において「自由論題」の形式を残しながら、他方において「共通論題」の形式を併行させることになった。

以上は本学会の研究報告の運営の仕方であるが、つぎに自由論題の研究報告者とそのテエマ、共通論題のテエマとその研究報告者について、第一回大会から第二〇回までのものを掲げておこう。

第一回大会（昭和二五年四月二二、二三日　早稲田大学）

第一日

(1) リカアドオと産業革命　東京大学　隅谷三喜男氏

(2) 価値論におけるリカアドオとベーリー　東北大学　玉野井芳郎氏

第二日

(3) リカアドオの分配論について　関西学院大学　堀経夫氏

(4) マルクスの抽象的労働の概念　早稲田大学　杉山清氏

(5) 「経済表」の現代的意義　横浜国立大学　越村信三郎氏

(6) 重商主義と近世国家の成立――歴史派的重商主義観の批判――　滋賀大学　白杉庄一郎氏

第二回大会（昭和二五年一二月九日　京都大学）

(1) アダム・スミス以前の自由貿易論について　同志社大学　相見志郎氏

(2) チュルゴー及びコンジヤックの主観価値論　早稲田大学　山川義雄氏

(3) イギリス重商主義の解体とスミス経済学の成立　東京大学　田添京二氏

(4) フィジオクラァトとルソオ　京都大学　河野健二氏

第三回大会（昭和二六年五月五日　東京大学）

(1) リカアドオの不変の価値尺度論　慶応義塾大学　遊部久蔵氏
(2) マルクスの価値形態論について　東京大学　鈴木鴻一郎氏
(3) ケネー学説における政策的背景　京都大学　菱山泉氏
(4) リカアドオの論理構造　関西学院大学　行沢健三氏
(5) 重商主義の批判的体系としてのスミス国富論　専修大学　内田義彦氏

第四回大会（昭和二六年一一月八、九日　関西学院大学）

第一日　共通論題「古典学派と重商主義」

(1) ベンジャミン・フランクリンと重商主義　関西学院大学　久保芳和氏
(2) アダム・スミスと貨幣数量説の論理　早稲田大学　堀家文吉郎氏
(3) イギリス・マアカンティリズムと国家論――トマス・ホッブスを中心として――　名古屋大学　水田洋氏
(4) スミスとマアカンティリズム　福島大学　小林昇氏

第二日　自由論題

(1) アーノルド・トインビィの賃銀論　広島大学　西村孝夫氏

(2) 自由貿易運動の発端としてのミル対スペンス市場論争　九州大学　岡茂男氏

(3) マルクス剰余価値論の基本性格　関西大学　杉原四郎氏

(4) スミスの地代論について　京都大学　溝川喜一氏

(5) ジョン・ラスキン経済思想の一検討　香川大学　木村正身氏

第五回大会（昭和二七年五月三、四日　慶応義塾大学）

第一日　共通論題「人口論」

(1) フランクリンの人口に関する見解　慶応義塾大学　渡辺国広氏

(2) 日本の人口及び人口研究の現状　慶応義塾大学　寺尾琢磨氏

(3) アメリカにおける人口理論の特質　関西学院大学　大道安次郎氏

第二日　自由論題

(1) マルサスの価値尺度論　松山商科大学　入江奨氏

(2) 社会思想家としてのマブリ　横浜国立大学　縫田清二氏

(3) フランクリンの価値論　尾道短期大学　三辺清一郎氏

(4) チャード・ジョーンズの経済学　一橋大学　大野精三郎氏

(5) 日本経済学史における歴史学派　同志社大学　住谷悦二氏
(6) 重農主義学説の基本的性格　東京大学　横山正彦氏

第六回大会（昭和二七年一一月八、九日　神戸大学）

第一日　自由論題

(1) 重農学派の価値論　横浜国立大学　平田清明氏
(2) クニースにおける民族の問題　京都大学　出口勇蔵氏
(3) 社会科学史としてみた経済学史　青山学院大学　榊原巌氏
(4) 初期マルクスの経済学研究　横浜国立大学　長州一二氏

第二日　自由論題

(5) マルクス恐慌論の若干問題　中央大学　石原忠男氏
(6) 「資本論」における「価値法則」の展開　関西学院大学　楠井隆三氏
(7) リカアドウ蓄積論の構成――古典学派の完成――　東京大学　吉沢芳樹氏
(8) ヒルファディングの信用理論について　横浜市立大学　古沢友吉氏

第七回大会（昭和二八年五月二、三日　一橋大学）

第一日　共通論題「経済学における『古典』理論と『近代』理論」

(1) アメリカ経済学の場合　関西学院大学　大道安次郎氏

(2) 経済学の五つの基本命題を中心として——生理学的解剖——　専修大学　平瀬巳之吉氏

自由論題

(1) 梅厳から堵庵へ——石門心学の経済思想史的一考察——　千葉大学　多田顕氏

(2) 蘇格人(スコット)アダム・スミス——スミス思想のよりよき理解のために——　一橋大学　上田辰之助氏

第二日　自由論題

(3) フランクリンの奢侈論　尾道短期大学　三辺清一郎氏

(4) マルクスの恐慌論について　東北大学　末永茂喜氏

(5) ジョン・ロック経済理論の構成　福島大学　羽鳥卓也氏

(6) 資本主義の限界状況におけるマルクスとウェーバー　中央大学　武藤光朗氏

(7) 「経済学批判」のプランについて　一橋大学　宮崎犀一氏

第八回大会（昭和二八年一一月七、八日　福島大学）

第一日　共通論題「リカアドウとマルサス」

(1) 国際価値論としての比較生産費説　中央大学　川尻武氏

(2) マルサスとリカアドウ——思想史上の前後について——　青山学院大学　榊原巖氏

(3) リカアドウ「機械論」の成立と発展　長崎大学　真実一男氏

(4) 穀法論争期におけるマルサスとリカアドウとの書簡上の利潤をめぐる論争　関西学院大学　堀経夫氏

自由論題

(1) アダム・スミスと「アメリカ体制」　関西学院大学　大道安次郎氏

第二日　自由論題

(2) 室鳩巣の社会経済思想について——享保期社会経済思想の一考察——　千葉大学　多田顕氏

(3) デュプュイの相対的効用理論について　早稲田大学　柏崎利之輔氏

(4) 生産力説の歴史的意味——フランス「百科全書」派の立場——　京都大学　河野健二氏

(5) 十七世紀英国における価値及び価格理論　山梨大学　飯塚一郎氏
(6) 貨幣数量説の本質　秋田大学　加藤一夫氏
(7) トーマス・ウィルソンの経済論——利子・為替論を中心にして——　福島大学　渡辺源次郎氏

第九回大会（昭和二九年五月八、九日　横浜国立大学）
（開催校は横浜国大、横浜市大、関東学院大、神奈川大の四大学）

第一日　共通論題「マルサスとリカアドウ」

(1) マルサス・リカアドウ研究の意義と問題　京都大学　岸本誠二郎氏
(2) リカアドウとマルサスの論理構造　専修大学　平瀬巳之吉氏
(3) マルサスの価値論と再生産論　慶応義塾大学　遊部久蔵氏
(4) リカアドウの経済学説　東京大学　玉野井芳郎氏
(5) リカアドウにおける資本蓄積と恐慌　福島大学　富塚良三氏
(6) マルサスの社会動態論　法政大学　中野正氏

第二日　自由論題

(1) リチャード・ジョーンズにおける生産的労働の概念　慶応義塾大学　平野絢子氏

(2) ジョサイア・タッカーと産業革命　福島大学　小林昇氏
(3) 江戸時代の正価思想　関西学院大学　東晋太郎氏
(4) 価値形態論と交換過程論　法政大学　久留間鮫造氏
(5) 資本論の体系について　立命館大学　梯明秀氏
(6) 共同報告「トマス・モア研究」
——イギリス商業資本と「ユートピア」　中央大学　田村秀夫氏
——モアの農本的思想について　早稲田大学　松田寛氏

第一〇回大会（昭和二九年一一月六、七日　関西大学）

第一日　共通論題「経済学史の方法論」……シンポジウム

司会者　京都大学　出口勇蔵氏
(1) 報告者　大阪市立大学　相沢秀一氏
(2) 同　神戸大学　林治一氏
(3) 同　東京経済大学　渡辺輝雄氏
(4) 同　東京大学　横山正彦氏
(5) 同　京都大学　島津亮二氏

第二日　自由論題

(1) 古典派の価値論について――特にリカアドウを中心として――　松山商科大学　入江奨氏

(2) 西鶴の『日本永代蔵』とディフォウの『イギリス商人大鑑』――東西経済思想の二つの典型――　一橋大学　上田辰之助氏

(3) 思想史上における司馬江漢　千葉大学　多田顕氏

(4) レーニンの『市場理論』について　京都大学　田中真晴氏

(5) マルクスとスターリン　慶応義塾大学　気賀健三氏

(6) フランクリンと奴隷制度　尾道短期大学　三辺清一郎氏

第一一回大会（昭和三〇年五月七、八日　中央大学）

第一日　自由論題

(1) ミルトンの社会思想について　滋賀大学　豆本薫氏

(2) マンデヴィルとアダム・スミス――経済学史におけるマンデヴィルの地位――　関西学院大学　田中敏弘氏

(3) イギリスのスミス　東京大学　大河内一男氏

第二日　自由論題

(4) ラヂーンチェフの農奴制批判――その主著『ペテルブルグからモスクワへの旅』を中心として――　一橋大学　渋谷一郎氏

(5) ベンサム経済理論の構造と発展　高崎短期大学　石本美代子氏

共通論題「アダム・スミス研究」

(1) スミスとベンサム――両体系の構造対比――　京都大学　山下博氏

(2) スミスにおける自然的なるものの経済学的意味　関東学院大学　大門一樹氏

(3) アダム・スミスにおける国富について　南山大学　森茂也氏

(4) スミス蓄積論の基本構成――リカードウとの対比　福島大学　富塚良三氏

第一二回大会（昭和三〇年一一月五、六日　大阪市立大学杉本町校舎）

第一日　自由論題

(1) シスモンディからみたイギリス古典経済学　法政大学　中野正氏

(2) 学史研究と近代経済学　一橋大学　山田雄三氏

(3) マルクスの「剰余価値学説史」について　東北大学　末永茂喜氏

第二日

(4) 社会思想史における藤樹　千葉大学　多田顕氏
(5) 経済学におけるイデアル・テイプス概念について　成蹊大学　安藤英治氏
(6) 経済学教科書の意義について　大阪市立大学　岡本博之氏
(7) フランクリンの製造業論　尾道短期大学　三辺清一郎氏
(8) トーリー・フリー・トレードの解体　立教大学　小林昇氏

第一三回大会（昭和三一年五月五日、六日　法政大学）

第一日　共通論題「古典学派一般」

(1) ルソーの経済思想　福島大学　羽鳥卓也氏
(2) リカードウの議会改革論と経済理論　吉沢芳樹氏
(3) シスモンディ経済学の古典的性格について　横浜国立大学　平田清明氏

第二日　自由論題

(1) 「アメリカ経済学会」の成立をめぐって――アメリカ経済学史の一節――　関西学院大学　大道安次郎氏
(2) マルクス信用論の展開――「経済学批判綱要」をめぐって――　北海道大学　石垣博美氏

(3) 「経済学批判」体系における「賃労働」問題――『資本論』と「賃労働」の関係を中心として――　慶応義塾大学　井村喜代子氏

(4) イギリス資本主義発展途上における清教主義経済倫理の変質　高崎短期大学　松浦高嶺氏

(5) 独逸官房学派に関する一考察　横浜国立大学　武藤正平氏

(6) 朱子学正学化の過程――寛政異学の禁研究序説――　千葉大学　多田顕氏

第一四回大会（昭和三一年一一月二、三日　同志社大学）

第一日　自由論題

(1) ジョン・ステュアート・ミルと社会主義思想　大阪府立大学　福原行三氏

(2) ヴェブレンにおける消費の思想について　早稲田大学　渋谷行雄氏

(3) リカアドオ“Essay on Profits”の一考察　九州大学　中村広治氏

(4) 松平定信の経済論　千葉大学　多田顕氏

第二日　共通論題「恐慌論」

(1) 『恐慌論』を進めるについての前書き　中央大学　石原忠男氏

(2) 近代景気循環理論の一つの型とそのシュムペーター理論

(3) シュピートホフの景気理論について　早稲田大学　伊達邦春氏

(4) 経済発展の一般理論――資本蓄積論の課題と方法――　都立大学　城座和夫氏

(5) 恐慌論の基本問題　大阪市立大学　吉田義三氏

(6) 恐慌論研究の方法について　立教大学　山本二三丸氏

中央大学　石原忠男氏

第一五回大会（昭和三二年五月一一、一二日　明治大学）

第一日　自由論題

(1) フリードリッヒ・リストの「経済発展段階」の概念に関する問題　早稲田大学　酒枝義旗氏

(2) ルイス・ロバーツの外国貿易論とその経済史的意義　大阪府立大学　西村孝夫氏

(3) ジェームズ・ハリントンの経済思想　小樽商科大学　浜林正夫氏

(4) ルカーチのイデオロギー論　京都大学　平井俊彦氏

第二日　共通論題「経済発展と資本蓄積の理論」

オーガナイザーの言葉　横浜国立大学　越村信三郎氏

(1) スミス蓄積論と利潤率低下法則の問題　武蔵大学　藤塚知義氏
(2) フランス古典派経済学の資本蓄積論——シスモンディを中心として——　名古屋大学　大島雄一氏
(3) 経済発展にかんする最近の近代理論について　横浜国立大学　宮崎義一氏
(4) マルクス体系における資本の流通過程と変動　九州大学　高木暢哉氏
(5) ソヴェート連邦における経済発展と蓄積の理論　一橋大学　野々村一雄氏
(6) 総括——資本蓄積論の問題点とその意義　横浜国立大学　越村信三郎氏

第一六回大会（昭和三二年一一月一六、一七日　関西学院大学）

第一日　自由論題

(1) 鎌田鵬（石門心学者）の思想について——徳川後期思想史研究——　千葉大学　多田顕氏
(2) 経済学移植の社会的地盤——明治経済学の場合——　関西学院大学　大道安次郎氏
(3) （特別講演）The Rise of Classical Sociology　Ronald L. Meek

第二日　自由論題

(4) イギリス経済学と海運　関東学院大学　伊坂市助氏

(5) W・ゴドウィンとW・タムソン——資本主義批判史の展開に寄せて——　慶応義塾大学　白井厚氏

(6) ベンジャミン・フランクリンの自由主義の性格　尾道短期大学　三辺清一郎氏

第一七回大会（昭和三三年五月一〇、一一日　立教大学）

第一日——公開講演——（共通論題ではあるが、その形式をとらない）

(1) 重農主義学説の階級的基盤　東京大学　横山正彦氏

(2) ケネー経済表の諸表式　一橋大学　坂田太郎氏

第二日　自由論題

(1) 生産的労働と所得　東京大学　金子ハルオ氏

(2) 戦後における理論模型の一つの発展方向——消費函数論争に寄せて——　明治大学　清水川繁雄氏

(3) マルクス恐慌論の一考察——景気循環と固定資本投資——　大阪市立大学　林直道氏

(4) ディドロと保護主義　関西大学　吉田静一氏

(5) イギリスにおける初期急進主義思想——ロバート・ウォーレスについて——

(6) 最近のフランスにおけるマルクス研究について　名古屋大学　永井義雄氏
(7) 明治前期移入社会科学とアメリカ「社会科学運動」との系譜関係　聖心女子大学　岡田純一氏
横浜市立大学　早瀬利雄氏

第一八回大会（昭和三三年一一月二、三日　立命館大学）

第一日　共通論題「ケネー研究」

(1) 経済表（原表）の構想　東京経済大学　渡辺輝雄氏
(2) ケネー経済表の現代的意義　横浜国立大学　越村信三郎氏
(3) 重商主義とフランス革命　京都大学　河野健二氏
(4) ケネーの賃金論　広島大学　狭田喜義氏
(5) ケネー学説における一問題　京都大学　菱山泉氏
(6) 経済表と範式との相互補足の解釈　徳島大学　橋本純二氏

第二日　自由論題

(1) 「特殊」な不況とニュー・ディール財政々策　京都大学　金田重喜氏
(2) ホッブス自然法思想の近代性解釈をめぐって——とくにウォリンダー氏の所論を中心として——

(3) 経済学史研究の立場について　横浜市立大学　田中正司氏

(4) 労働価値説と現代資本主義――とくにマルクス地代論の誤りについて――　京都大学　石川興二氏

早稲田大学　堀江忠男氏

(5) 石門心学と武士階級　千葉大学　多田顕氏

(6) 古典派の根本的盲点の一つとしての開放、封鎖両経済体系概念の区別　関西大学　有田稔氏

第一九回大会（昭和三四年五月九、一〇日　専修大学生田校舎）

第一日　自由論題

(1) マルクス生産価格論の意義と限界――恐慌論の視角からする一考察――　名城大学　松岡寛爾氏

(2) 利子率法定論争と賃金――十七世紀イギリスにおける――　福島大学　渡辺源次郎氏

(3) スチュアート『原理』の歴史的背景　立教大学　小林昇氏

第二日　自由論題

(4) チャーチズムにおける労働者の性格とその思想　慶応義塾大学　野地洋行氏

(5) オーウェン主義の成立——恐慌観と労働価値＝貨幣論を中心として——　立命館大学　松田弘三氏

(6) サン・シモンの産業主義思想　京都大学　坂本慶一氏

(7) J・S・ミルの利潤論に関する一考察　関西大学　杉原四郎氏

(8) マックス・ウェーバーの農政論　甲南大学　山口和男氏

(9) 寛政期社会思潮管見——松平定信を中心として——　千葉大学　多田顕氏

第二〇回大会（昭和三四年一一月七、八日　九州大学）

第一日　自由論題

(1) 国民所得分析と投入産出分析——乗数理論、成長理論を中心に——　神戸商科大学　村田安雄氏

(2) 古典的恐慌論の発展形態　東北大学　末永茂喜氏

(3) フリードリッヒ・フオン・ゴットル教授の生活と業績について　早稲田大学　酒枝義旗氏

第二日　自由論題

(4) マルクス体系における価値の概念　東京都立大学　城座和夫氏
(5) アダム・スミスの重商主義論　同志社大学　相見志郎氏
(6) 現代資本主義論の方法について　久留米大学　馬場元二氏
(7) 開かれた体系としての「資本論」　立命館大学　梯明秀氏
(8) 人口論者としての Giovanni Botero について　中央大学　南亮三郎氏

以上が第一回大会より第二〇回大会までの研究報告会のあらましであるが、念のため重ねて開催校、自由論題の研究報告者数、共通論題のテエマなどについて要約的に記しておこう。

A 開催校

第一回　早稲田大学　昭和二五・四
第二回　京都大学　二五・一二
第三回　東京大学　二六・五
第四回　関西学院大学　二六・一一
第五回　慶応義塾大学　二七・五
第六回　神戸大学　二七・一一

B 研究報告者数（自由論題）

第一回　六名
第二回　四
第三回　五
第四回　五
第五回　六
第六回　八

第七回	一橋大学	昭和二八・五	第七回	七名
第八回	福島大学	二八・一一	第八回	七
第九回	横浜国立大学、横浜市立大学、神奈川大学	二九・五	第九回	六
第一〇回	関西大学	二九・一一	第一〇回	六
第一一回	中央大学	三〇・五	第一一回	五
第一二回	大阪市立大学	三〇・一一	第一二回	八
第一三回	法政大学	三一・五	第一三回	六
第一四回	同志社大学	三一・一一	第一四回	四
第一五回	明治大学	三二・五	第一五回	四
第一六回	関西学院大学	三二・一一	第一六回	七
第一七回	立教大学	三三・五	第一七回	七
第一八回	立命館大学	三三・一一	第一八回	六
第一九回	専修大学	三四・五	第一九回	九
第二〇回	九州大学、西南学院大学、福岡商科大学	三四・一一	第二〇回	八

C　共通論題のテエマ

第四回　古典学派と重商主義

第五回　人口論
第七回　経済学における「古典」理論と「近代」理論
第八回　リカアドオとマルサス
第九回　マルサスとリカアドオ
第一〇回　経済学史の方法論
第一一回　アダム・スミス研究
第一三回　古典学派一般
第一四回　恐慌論
第一五回　経済発展と資本蓄積の理論
第一八回　ケネー研究

Ⅱ　経済学古典書展示会

日本の各大学図書館や研究室にはそれぞれ貴重な経済学の古典書を蔵しているところが多い。これらの大学が開催校となったときに、大会開催を機会に、その大学の蔵書を中心に、ときには関係者の蔵書も加えて、一般の研究者に公開し、参考に供するために、ときに応じて「経済学古典書展示会」が開かれている。このような企ては経済学史学会に適わしいものであって、他の学会の現地見学やエキスカーションにも比すべきものであろう。

この十年間につぎのような「経済学古典書展示会」がもたれている。（その詳細は附録Ⅰ参照）

第二回大会　京都大学　京大図書館所蔵貴重書展示

第三回大会　東京大学　東大経済学部所蔵のスミス蔵書中約二〇点経済学部研究室にて展示

第四回大会　関西学院大学　関学大及び堀経夫氏所蔵のロバート・オーエン及びリカーディアン・ソシャリストの著書約六三点展示

第五回大会　慶応義塾大学　慶大所蔵（他に高橋誠一郎、寺尾琢磨、久保田明光諸氏特別出品）の人口学説五六点、東印度会社関係四五点の展示

第六回大会　神戸大学　神戸大所蔵の経済学古典一一〇点余の展示

第七回大会　一橋大学　一橋大所蔵のカール・メンガーの著書・論文八部一一点、メンガー文庫中の古書四〇部六六点、その他三点の展示

第十七回大会　立教大学　早大・大原社研・横浜国大・慶大・東大・一橋大所蔵のケネー・デュポン・ミラボーの著書二四部の展示

Ⅲ　公開講演会

公開講演会の開催も本学会の大切な事業の一つである。大会開催の機会に、また適当な機会に、経済学史学会

に適わしい公開講演会がもたれている。つぎのような公開講演会がこれまでに開かれた。

マルクス生誕一三五年死後七〇年記念学術講演会（昭和二八・一〇・一〇　東京大学）

マルクス再生産論の展開　越村信三郎氏

マルクスにおける人間の問題　大河内一男氏

マルクスと現代の経済学　岸本誠二郎氏

ジョン・ステュアート・ミル生誕一五〇年記念公開講演会（昭和三一・一一　同志社大学）

J・S・ミルの生涯と業績　杉原四郎氏

明治初期の思想に及ぼしたミルの影響　堀経夫氏

社会思想史上のミル　出口勇蔵氏

ミルにおける経済学と社会学　大道安次郎氏

ケネー経済表二〇〇年記念公開講演会（昭和三三・五・一〇　立教大学）

挨拶　久保田明光氏

重農主義学説の階級的基盤　横山正彦氏

ケネー経済表の諸表式　坂田太郎氏

ケネー経済表二〇〇年記念公開講演会（昭和三三・一一・一　同志社大学）
（理論経済学会と本学会との共催）

挨拶　久保田明光氏

ケネー経済表初版の推定　渡辺建氏

経済表の謎と経済学の使命　柴田敬氏

Ⅳ　地方部会

本学会の会則第三条に「別に定めるところによって地方部会を開くことができる」という規定がある。このように全国的規模の学会は、ただに本学会だけでなく他の学会でも、地方部会や部門別部会を持つことは当然なことである。ところで本学会において、この規定が単に条文の上だけでなく実際に地方部会を持つようになったのは第六回大会からである。その前の第五回大会（昭和二七年五月　慶応義塾大学）の総会の席上で、横山正彦会員より、地方部会乃至研究部会設置の動議があり、久保田代表幹事から実行案を示されたいこと、実績によって経費等考慮すべきこと、正式決定は後日に延ばしてはなどの答弁があったことから、本学会においても地方部会設置の動きが起ったのである。そして第六回大会（昭和二七年一一月　神戸大学）の総会において、関東部会と

関西部会の二つの地方部会が正式に承認されたのである。その後西南部会も設置され、東北部会の設置の準備も進められている。

さてこのようにして発足した本学会の各地方部会の昭和三五年三月末までの活動状況はつぎの通りである。

関　東　部　会

関東部会が正式に承認されるまでにすでに、関東研究会として三回の研究会を開いている。そして正式承認とともにこれまでの研究会世話人を部会幹事とすることにした。

研　究　報　告　会

昭和二七年六月一四日（東京大学）
経済学における古典と近代　一橋大学　杉本栄一氏

昭和二七年九月二七日（法政大学）
マックス・ウェーバー――方法論争について――　成蹊大学　安藤英治氏

昭和二七年一〇月二五日（中央大学）
二つの経済学――その概念構成　専修大学　平瀬巳之吉氏

昭和二七年一二月二〇日（早稲田大学）
トマス・モアー「ユートピア」における経済思想　早稲田大学　松田・寛氏

ケネー「経済表」の均衡体系の攪乱について　早稲田大学　久保田明光氏

昭和二八年二月七日（立教大学）

経済学方法論について　立教大学　宮川実氏

昭和二八年四月一一日（慶応義塾大学）

西欧経済思想受容の在り方――わが国における合理思想の淵源――　慶応義塾大学　野村兼太郎氏

昭和二八年六月二〇日（専修大学）

リカァドオ経済学の問題点　東京大学　玉野井芳郎氏

昭和二八年九月一二日（中央大学）

価値形態と交換過程　法政大学　中野正氏

昭和二八年一二月五日（専修大学）

内田義彦著『経済学の生誕』合評　国学院大学　宮崎犀一氏　東京大学　吉沢芳樹氏

昭和二九年二月一三日（中央大学）

マルサスとリカァドオ　東京大学　玉野井芳郎氏

昭和二九年七月九日（中央大学）

高島善哉著『社会科学入門』をめぐって高島善哉氏（一橋大学）を囲む座談会

昭和二九年九月二五日（中央大学）

再生産表式と恐慌　中央大学　高木幸二郎氏

昭和二九年一〇月二三日（東京大学）

リカァドオ経済学の社会性　静岡大学　戸田武雄氏

昭和二九年一二月二三日（早稲田大学）

スミス研究の問題点について　一橋大学　高島善哉氏

昭和三〇年六月四日（法政大学）

リカァドオ経済学の生成と労働価値説との関連　法政大学　時永淑氏

昭和三〇年七月二日（慶応義塾大学）

リカァドオの議会改革論と経済学の分析視角　東京大学　吉沢芳樹氏

昭和三〇年九月一七日（法政大学）

シュンペーター『経済分析の歴史』の方法論について　一橋大学　山田雄三氏

昭和三〇年一〇月二二日（専修大学）

経済学におけるイデアル・ティプス概念について　成蹊大学　安藤英治氏

昭和三一年六月三〇日（専修大学）
景気変動理論の理論構造と十九世紀後半の西欧経済　都立大学　城座和夫氏

マルクス恐慌論の再検討　早稲田大学　堀江忠男氏

昭和三一年九月二九日（専修大学）
シュンペーターの景気変動論について――特に恐慌現象に関連して――　早稲田大学　伊達邦春氏

昭和三一年一一月二〇日（専修大学）
恐慌論研究の方法について　中央大学　石原忠男氏

昭昭三二年六月二二日（慶応義塾大学）
R・ミークの古典学派研究について　専修大学　吉田洋一氏

昭和三二年一〇月二六日（法政大学）
ミーク著『労働価値説の研究』について　法政大学　尾形憲氏

昭和三三年四月五日（如水会館）
国富把握の体系としてのケネーの経済表　東京経済大学　渡辺輝雄氏

昭和三四年九月二六日（東京大学）

労働価値学説における（生産）概念の二重性と微視的方法の併用の問題　神奈川大学　大熊信行氏

昭和三五年三月二六日（東京大学）

欧洲から帰って　名古屋大学　水田洋氏

関西部会

関西部会は発足以来昭和三三年まで、出口勇蔵（京都地区）、小谷義次（大阪地区）、久保芳和（神戸地区）の三氏が部会幹事となり、年三回（一月・六月・九月）京阪神三地区で順次研究会を開催して来た。そしてこの間部会事務局は関西学院大学におかれていたが、昭和三三年五月第十七回大会で学史学会本部が関西学院大学におかれることになったのを機会に、部会事務局は関西大学に移され、部会幹事も相見志郎（京都地区）、杉原四郎（大阪地区）、林治一（神戸地区）三氏と交代した。

研究報告会

第一回　昭和二七年一二月一三日（関西学院大学）

J・S・ミルの経済政策について　浪速大学　福原行三氏

第二回　昭和二八年二月七日（同志社大学）

French Mercantilism　アマースト大学　Dr. C. W. Cole

第三回　昭和二八年六月二〇日（大阪市立大学）

墺太利学派生成期における若干の方法的問題　神戸大学　林　治一氏

マブリ研究　京都大学　田中真晴氏

第四回　昭和二八年九月二六日（立命館大学）

フォイエルバッハと市民革命　京都大学　平井俊彦氏

商品の端緒的二重性　立命館大学　梯　明秀氏

第五回　昭和二九年二月二〇日（神戸大学）

資本論における利潤率についての一考察　浪速大学　和田貞夫氏

トーマス社会論の存在論的基礎　神戸大学　野尻武敏氏

第六回　昭和二九年六月二六日（大阪女子大学）

経済学史の対象と課題　滋賀大学　白杉庄一郎氏

経済学史の方法　京都大学　出口勇蔵氏

第七回　昭和二九年九月二五日（京都大学）

共通論題　経済学史の研究方法について　京都大学　島津亮二氏

第八回　昭和三〇年二月二六日（関西学院大学）
ミルトンの社会思想　神戸大学　林　治一氏
マンデヴィルとスミス　大阪市立大学　相沢秀一氏

第九回　昭和三〇年六月一八日（関西大学）
リカアドウ理論の性格について　滋賀大学　豆本薫氏
関西学院大学　田中敏弘氏

第一〇回　昭和三〇年一〇月一日（同志社大学）
初期重商主義についての一考察　滋賀大学　松尾博氏

第一一回　昭和三一年一月二八日（甲南大学）
スミスの富裕進歩論について　滋賀大学　白杉庄一郎氏
関西学院大学　宮内博氏

第一二回　昭和三一年六月三〇日（大阪市立大学）
リカアドウの再生産論　松山商科大学　入江奨氏

第一三回　昭和三一年九月二九日（京都大学）
資本蓄積および恐慌に関するリカアドウの理論について　立命館大学　松田弘三氏

第一四回　昭和三二年二月一六日（神戸大学）

堀博士還暦記念論文集『古典派経済学の研究』について　関西学院大学　行沢健三氏

第一五回　昭和三二年九月二八日（大阪女子大学）

ミーク『労働価値論研究』について

1アダム・スミス（第二章）を中心として　京都大学　田中真晴氏

2第三章以降　和歌山大学　宮本義男氏

第一六回　昭和三三年三月二二日（立命館大学）

クリフ・レスリーの経済学方法論――イギリス歴史学派の一研究――　愛知学院大学　岸田理氏

第一七回　昭和三三年六月二八日（甲南大学）

リカアドウの価値論と分配論との関係についての一考察　神戸大学　中村一雄氏

第一八回　昭和三三年九月二七日（関西大学）

初期マルクスの一考察――経済学批判への端緒としての「ジェームズ・ミル評注」を中心として――　関西大学　重田晃一氏

第一九回　昭和三四年一月三一日（同志社大学）

重商主義についての一つの問題――ジョン・ウイラーを中心として――　同志社大学　相見志郎氏

第二〇回　昭和三四年六月二七日（神戸商科大学）

経済学史の方法について　神戸商科大学　高木正雄氏

第二一回　昭和三四年九月二六日（大阪府立大学）

真実一男著『機械と失業』を読んで　関西学院大学　豊倉三子雄氏

豊倉三子雄著『古典派恐慌論』を読んで　甲南大学　溝川喜一氏

第二二回　昭和三五年一月三〇日（滋賀大学）

特別剰余価値と虚偽の社会的価値　滋賀大学　白杉庄一郎氏

最近のヨーロッパ経済学界の事情　名古屋大学　水田洋氏

なお関西部会活動として特筆すべきことは「部会通信」を発行していることである。第一号は昭和三四年九月二六日、第二号は三五年一月三〇日、第三号は三五年五月一四日がすでに出ている。その第三号までの発行責任者は関西大学の杉原四郎会員である。

西南部会

西南部会は大体年二回（夏と冬）開催し、発足当初は部会幹事ないし幹事校は置かず、すべてもちまわりで運営されていたが、種々不便があるので、近く部会事務局も決定される模様である。

研究報告会

第一回　昭和三一年一月二日（九州大学）

リカアドウ経済学の構造　九州大学　中村広治氏

穀物法論争におけるマルサスとリカアドウ　西南学院大学　横溝軌一氏

ケネーの賃銀論　広島大学　狭田喜義氏

第二回　昭和三一年六月九日（山口大学）

重商主義解体時における東印度貿易論　山口大学　藤本保太氏

生産関係について　山口大学　内田一男氏

リカァドウの初期の経済理論の楽観的性格について　広島大学　林登良雄氏

第三回　昭和三二年一月一九日（福岡大学）

人間関係論に関する一考察――E・メイヨーの思想について　九州大学　副田満輝氏

J・S・ミル社会思想の一考察　長崎大学　池田一浩氏

近代経済学の形成と発展

(イ) 特に限界原理を中心として　山口大学　高木真助氏

(ロ) 限界生産力説の発展に寄せて　広島大学　狭田喜義氏

第四回　昭和三二年七月六日（九州大学）

独占資本主義の諸問題——帝国主義論の方法について——　久留米大学　馬場元二氏

効用理論の発展と社会的効用函数の決定について　熊本大学　有田一郎氏

労資関係論の位置づけ——経営民主主義の問題——　長崎大学　川崎文治氏

価値論争史の一齣　九州大学　川口武彦氏

第五回　昭和三三年一月二五日（久留米大学）

近世初頭におけるドイツの商業資本について　久留米大学　松田緝氏

金属流通と紙券流通——リカァドウ貨幣論の一考察——　九州大学　深町郁弥氏

過少消費説の現代的課題　広島大学　前田豊昭氏

石川興二「創造的世界経済学序説」（経済論叢第八〇巻第四号）分析　熊本大学　有田一郎氏

第六回　昭和三三年七月五、六日（広島大学）

第一日

絶対主義と商業資本　九州大学　山村延昭氏

労働価値説の一問題点　福岡大学　長岡豊氏

トーマス・マンの経済理論　西南学院大学　遠山馨氏

ペティとフランクリンの価値論をめぐって　尾道短期大学　三辺清一郎氏

第二日

再生産論について（自由討議）　広島大学　建林正喜氏

九州大学　高木暢哉氏

九州大学　高木幸二郎氏

第七回　昭和三四年一月三一日（西南学院大学）

大塚教授「信用関係の展開」について　九州大学　川島信義氏

固定資本の回転と恐慌　広島大学　建林正喜氏

信用学説の展開　九州大学　高木暢哉氏

第八回　昭和三四年七月一一日（長崎大学）

貨幣取引資本について　鹿児島県立短大　管　知彦氏

マルクス経済学の方法にかんする問題点　久留米大学　馬場元二氏

利子付資本と信用理論――古典学派とマルクス――　大分大学　竹村脩一氏

適正価格論としての厚生経済学　山口大学　高木真助氏

V　内外の経済諸学会との連絡

まず国内の経済諸学会との連絡についてみると、日本経済学会連合との連絡・関連がある。昭和二五年四月に本学会は成立したが、それより少し以前の一月二二日に日本経済学会連合が発足した。本学会の成立が予想されていたので、正式の成立を待たずに本学会はこの連合に参加し、評議員として本学会の発企人の間から一橋大学の大塚金之助氏と関西学院大学の堀経夫氏とを送った。（本学会正式成立の会員総会においてこの件は承認された。）このように本学会成立以前からすでに日本経済学会連合との結びつきは緊密なものがあり、現在に及んでいる。

現在までに同連合の評議員として送った本学会の会員はつぎの諸氏である。堀経夫氏（昭和二五年―三三年）、越村信三郎氏（昭和三三年―現在）、久保田明光氏（昭和三三年―現在）、大塚金之助氏（昭和二五年―三三年）。

なお本学会は学問の系列の上から日本学術会議第三部会に属している。本学会会員でこの会議の議員として選出されたのはつぎの諸氏である。（数字は期数を、全は全国区を、地は地方区を示す）

出口勇蔵（4・全）　早川三代治（2・3・地）
井藤半弥（1・2・全）　梯明秀（5・全）
岸本誠二郎（5・全）　久保田明光（1・2・4・全）
水田洋（5・地）　森耕二郎（1・2・3・地）
守屋典郎（3・4・5・地）　名和統一（1・2・3・4・5・全）
野村兼太郎（1・2・全）　大泉行雄（5・地）
坂本弥三郎（2・全）　住谷悦治（3・全）
高垣寅二郎（1・2・3・4・5・全）　高橋誠一郎（1・2・全）
戸田武雄（4・地）　矢口孝次郎（4・全）

また経済学研究連絡委員会があるが、この委員会に本学会から送られた委員は大塚金之助会員である。

さらに対外的な学術交流についていえば、国際学会への出席ならびに海外の知名の学者を迎えるなどその活動は活発である。

Ⅵ　その他の事業

本学会会則第三条の五に、「その他本会の目的を達するために必要な事業」を行うことを規定しているが、この必要な事業として、この十年間に行った主なるものは、㈠わが邦における経済学古典文献調査及び研究、㈡経済学古典飜刻である。これらの事業について以下若干の言葉を費しておこう。

㈠　わが邦における経済学古典文献調査及び研究

この事業は全国に散在している経済学古典の存在を調査し、その所在を会員に知らせ、研究上の便宜に供そうとすることを目指すものであるが、これはただに本学会の会員のみならず、経済学関係の諸学会の会員にとっても極めて有意義な事業である。このためにいちはやくすでに第一回大会でこの事業のことが議にのぼったが、実際にこの議が学会として正式にとりあげられたのは、第四回大会（関西学院大学における）においてであった。第四回大会の第一日の懇親会でこの事業の実現についての要望が強く出たので、第二日の正午に緊急幹事会を開き、舞出、堀、久保田、岸本（大塚幹事は所用のため欠席、しかしその朝久保田幹事より構想を説明し、了承を得ていた）の各幹事が集って、堀幹事の原案を中心に協議し、これを午後の研究報告会終了後の総会で、委員会の構成、委員の人選等は幹事会に一任という形で可決された。その要点はつぎの通りであった。

幹事の出ている大学（東大、早大、慶大、一橋大、京大、神大、関学大）から各二名（幹事を含めて）、その他は文献を多く所蔵していると考えられるつぎの各大学（小樽商大、東北大、法政大、名大、山口大、九大、横浜大、大阪市大）より各一名の委員を選出して委員会をつくる。

この決定に基づいて、第一回の幹事打合会を、昭和二七年二月一六日に早大大学院経済学研究室において開催

した。関西側よりは堀幹事の代理として大道安次郎氏、関東側よりは久保田、野村幹事（舞出、大塚幹事は欠席）が出席して、つぎのように決定し、同案を関西側では堀幹事が坂本、岸本幹事に連絡報告し、関東側では久保田幹事が舞出、大塚幹事に連絡報告することにした。その決定はつぎの通りであった。

(1) 組織の名称

本邦における経済学の古典の調査及び研究

(2) 調査範囲

1、一六世紀より限界革命（一八七〇年代）以前までのものに限定すること。

2、著名な学者の著作は本来の経済学的業績以外のものも網羅すること。（たとえば、スミスの場合「哲学上の主題に関するエッセイ」なども含める。）

3、原典のリプリントも含めること。（但し調査完了後、調査報告を整理する時には、委員会で著作権の侵害になっているようなリプリントは取除くこと。その理由はこの成果を刊行して海外にも送る予定であるから。）

(3) 調査方法

1、先ず第一期計画として本年度は委員を出している大学所蔵のものについて調査し、逐次他の機関及び個人の蔵書に及ぶ。

2、先ずカード式を採用しデュプリケートをとる。

3、書名、著者名、発行年次、発行所、発行場所、版次(増改訂の有無)、頁数(サイズの調査はしない)。
4、図書目録からの抜き書きでなく、現物について調べる(焼失、紛失等があるから)。
5、調査カード全部が集ったときに、委員会で検討研究する。

(4) 調査研究分担者

甲、幹事を出している大学(第四回総会で各二名と決定している。)

1、東大*　大河内一男　横山正彦
2、一橋大　大塚金之助　松*川七郎
3、慶大　野村兼太郎　遊部久蔵
4、京大**　岸本誠二郎　他一名
5、神戸大　坂本弥三郎　南*方寛一
6、関学大　堀経夫　大道安次郎
7、早大　久保田明光　山川義雄

乙、幹事を出していない大学(第四回総会で各一名と決定している)

8、小樽商大　早川三代治
9、東北大　末永茂喜
10、法政大　久留間鮫造

11、名　大　水　田　洋
12、大阪市大　未***定（堀幹事に一任）
13、山口大**　坂　田　太　郎
14、九　大　高　木　暢　哉
15、横浜大　越　村　信　三　郎

*印は後日決定。**印は初年度は都合により参加しなかった。***印は堀幹事が兼担することになった。

(5) 経　費

1、科学研究費（総合研究）の交付を申請する。

2、金額一八四万円。* その計算の基礎はつぎの通りである。（*申請の時は、一九五万円に変更した）

イ、一応各大学一〇万円宛とし、交付が決定したとき、蔵書の多寡によって調整すること……一五〇万円。

ロ、関西支部（堀幹事に一任）……一〇万円。

ハ、本部費（カード作製代四万円、通信費、消耗品費、本部の謝金、雑費等二〇万円）二四万円。

(6) 総合調査の代表者は久保田代表幹事とする。

（附記）この調査は一応委員校所蔵のものを対象とするが、それと直接関係のある機関にも及ぶことがある。従ってそれによってそこへの研究費割当金額は変更する予定。

各大学に割当てられる金額は、そこでの消耗品（但しカードは本部で作製）費、謝金、雑費等に充てること。

上記の決定に基づいて、久保田代表幹事の手によって文部省科学研究費の交付申請書を作製し、研究分担者の承諾書をえて、三月三一日に文部省に提出した。幸いにしてこの申請は承認されたが、初年度は三五万円の交付しか認められなかった。以上がこの事業の発足までの経緯である。

この事業は昭和二七、二八、二九年度の三カ年にわたって文部省科学研究費（三年間で総額一四五万円）の交付を受け、継続して行われた。この間、山口大学が、調査研究分担予定者の所属変更のために一応取り止めることとなった以外は、当初の計画通りその他の十四機関において実施された。

調査研究の実施に際しては、前記の調査方法によって示された如く、カード方式をとり、図書目録からの抜き書きでなく、一々現物に当って原典の現状に忠実であることを基本原則とした。また、調査の進行に伴なって生じる具体的な技術上の問題についても、関係者全部が数回にわたって打合せ会を開き、その結果、それぞれの機関において行われる調査研究を、できるだけ統一して研究の着実な進行をはかるために、代表者の手許で『「経済学古典調査」（略称）のカードの記入要綱（総合版）』（一八頁からなるパンフレット）が作成された。これによって調査の結果のカード記入様式が統一されることとなったが、同時に調査項目も当初の計画より拡大されて、調査機関略称、調査機関のカード番号、著者名、書名、冊数、発行年次、頁数、発行所、発行場所、大いさ、版次（増・改訂の有無）、所蔵場所、所蔵機関の図書番号、および備考の各項目となり、備考には特徴的な事項が記入

されることとなった。また全集物等の扱い方やリファレンス・カードの作成、所定の余白に記入できないばあいの貼付用紙の使用などについても、確認されあるいは準備されることとなった。

右のような慎重な基礎的作業に基づいて、三カ年にわたる文部省科学研究費によって行われたこの事業の成果は、その後の残務としての分を含めて、現在一万三千余枚のカードとして、早稲田大学大学院経済学研究科研究室内に保管されている。これらのカードの整理・検討は未完であり、当初に予定されていた委員会も費用の制約のためにもつことができなかったが、包蔵するところは著者数にして略二千五百名と無記名のもの数百枚、書物の種類にして数千点に達するものと推定されており、これらがさらに整備補充された形で公刊出来ない事情にあることが惜しまれている。

この種の事業は、かすに相当の日時と費用をもってしなければ十分な成果を期し難いが、科学研究費の継続が三カ年ということであるので、現在は一応終了の形となっている。しかしながら、本学会が誇りうる一つの事業として、多大の労力と細心の注意力と根気強い忍耐力を必要とするこの調査研究が、限られた期間中に前記のような成果を挙げることができたのは、学会創立以来の会員総員の熱意の存するところであるが、特に直接関与された各調査機関の方々の一方ならぬご尽力の賜であることを銘記すべきであろう。

(二)　経済学古典の飜刻

本学会において経済学古典書の飜刻についての希望が多数の会員のうちにあったが、正式にそれが取りあげら

れたのは第七回大会の第一日の幹事会においてであった。堀幹事が中心となって委員会を設けて実施することにしたが、第二日の幹事会においてつぎのようにその実行方法を改めた。大会後その主旨を全会員に通知し、希望を求めて準備する。それまでは別に委員会を設けないで、幹事会がその任にあたる。委員会はその上で考慮すること。さらに飜刻の際は各巻毎に簡単な序文をつけることなど。以上の幹事会の決定は第二日の総会において原案通り承認された。

つぎの第八回大会の総会においてアンケートの結果について議したが、その席上では実施の具体的な方法についてはいまだ決定をみなかった。

その実施方法については第十回大会の総会において漸く決定を見た。そして最初の飜刻書は Hull 版 *The Economic Writings of Sir W. Petty*, 2 vols.（価二、〇〇〇円）とし、専ら堀幹事の手を煩わすことになった。ひきつづいて現在までつぎの経済学古典書が飜刻されている。（いずれも会員のアンケートによる要望に従っている。）

James Steuart, *Principles of Political Economy*, 1767. 2 vols.

A. Smith, *Theory of Moral Sentiments*.（Moral Sentiments は1822年版の全集からとり、巻末に付した Account of the Life and Writings of Adam Smith LL. D. は Dugald Stewart の全集からとった）

経済学古典書の飜刻の事業は極めて困難なものがある。飜刻書店との交渉、印刷校正、会員への頒布など煩わしいことが多い。これらの困難を克服して、わが国の学会としては稀れな例外に属するこの難事業をこれまでに成しとげることができたのは、堀幹事はもちろんのこと、堀研究室の久保会員その他の方々のご尽力によってで

ある。本学会の名においてその労に謝すべきである。

なお本学会の事業としてリカアドオ全集（スラッファ版）飜訳の件が第八回大会、第十一回大会において議案にのぼったが、いまだ最終的決定を見ず現在にいたっている。

以上が本学会のこの十年間に行った事業の主なるものである。ただ残念なことは、事業計画のうち本学会として是非実現すべくしていまだに実現を見ていないのは、学会の機会誌発行の件である。これまでいろいろ実現について幹事会などでも協議が重ねられたが、隘路が多くいまだ実現の運びにいたっていない。学会も十周年を劃したこととて、何とかその実現の途を開きたいものである。

（附）　警職法問題についての声明

本学会は純然たる学術団体であって、政治団体ではない。しかし昭和三三年の秋の国会に上程された警察官職務執行法改正案については学問研究の自由を圧迫するものであるとの見解から、第一八回大会（立命館大学で開催）の第一日の総会（昭和三三年一一月二日）においてつぎのような声明を発表することを決議した。

「現在国会において審議中の警察官職務執行法改正案は基本的人権を侵害し学問・思想の自由および言論・出版の自由を圧迫するおそれがあるものとみとめられる。よってわれわれは同法案に反対の意を表明する」

このような声明が本学会の名において発せられたのは本学会にとって最初のことである。

経済学史学会十年の歩みを顧みて

久保田明光

周知のようにアメリカ経済学会は昨一九六〇年九月で創立七十五周年を迎えたのであるが、たまたまその機関誌の The American Economic Review の一九六〇年九月号の巻頭に載せられたイギリスのナッティンガム大学の経済・社会史の講師コーツ博士（A. W. Coats）の「アメリカ経済学会の最初の二十年」と題する一文を読んで、寔に多くの示唆を得た。とくにその創設に当って若冠三十才をこえたばかりのイリー博士の果した役割（――彼は私の恩師塩沢昌貞先生の旧師であった――）、その当時のアメリカにおける経済学の研究状況等々についてあらたに知り得たことも少くなかったのである。然し私は今ここでアメリカ経済学会創立当時のことを語ろうとするのではない。実はその The American Economic Review のそれにつづく十二月号にカァヴァ博士（T. N. Carver）のコメントがのっており、その短かいコメントの冒頭に、"I will not pretend that I can add anything of importance to Dr. Coats's article on the early years of the Association" と書かれているその言葉そのままを借りて、われわれの学会の十年史を編んで下さった大道博士とその協力者の同僚諸君に心からの御礼を申上げたいのが一つの理由なのである。カァヴァ博士といえばもう九十五才の、正に現存のアメリカ経済学者の最長老であろう。その大先輩を真似て彼より三十も年下の若僧の私が、この貴重なスペースを与えられたにも拘らず、われわれの学会についての思出も書き綴らずに逃れてしまうのを僭越至極とお叱りをうけることをた

だただおそれるのであるが、この初期アメリカ経済学会のことに言及したもう一つの理由は、われわれの学会の寔にすこやかな「最初の十年」の歴史とそれとを対比したかったからである。私は選ばれて最初の八年間代表幹事の地位を汚したが、その間学会のためにはほとんど御役に立たなかったと思う。学会の今日あるのは、ひとえに幹事諸君はもちろん全会員諸君の絶大な御協力の賜物であると信じている。とりわけ学会創立の発企は現在の代表幹事堀博士の強い御要望の結果であり、私にとって最も多くの御力をかしていただいたのも同博士であったのである。またわれわれの学会の専門分野は、もちろんひろく経済学一般をおおうアメリカ経済学会のそれとは異るのであるが、お互いに同じく経済学者である以上は、その方法論ないしは現実の経済問題に対する接近の態度にはそれぞれの間に異るものがあることには相異はない。それにも拘らず、初期におけるアメリカ経済学会が経験したような偏狭な対立も排他性もなく、われわれはいつも明るくのびのびと、然しながら理論の上では真剣に討論し合って来たこと、そのことが今日の盛大な発展をかち得た一番主要な理由であると思うのである。寔にわれわれの学会の十年の歩みの基底に流れていたものは、正に会員諸君の強力な学問的な esprit de corps であると確信してやまない。Economists never agree! とは屢々専門的経済学者への不信をおこさせる可なりひろがっている印象を語る言葉であるとベンジャミン・ヒギンスだったか書いたことがあるが、それはそれでよいと思う。われわれが過去十年歩んで来たと同じ様な学問的なクライメットが、われわれの学会にこれからも長く続くであろうことを期待してこの小文の筆を擱きたいと思う。

経済学史学会の過去を思うて将来に及ぶ

堀　経　夫

私は、第二次世界大戦以前から存在していた社会経済史学会や理論経済学会の当初会員である。それは、私がかつて（大正十二年から昭和七年まで）東北大学法文学部で、経済史および経済学史を含む講座――経済学第二講座――を担当していたからである。しかし、私の本来の専攻は経済学史であった。ゆえに、社会経済史学会は、私の経済学史の研究に対する経済史的背景を教えてくれた、という意味において、また理論経済学会は、経済学史部門をその中に含んでいた、という意味において、私の研究生活の歴史――それは、私が京都大学の大学院に入学した年から数えれば、四十年と六ヵ月になる――に対して、それぞれまことに重要な意義をもっているのであって、多数の会員諸氏によって直接または間接に啓発された点は、数え上げることができないほどであるにもかかわらず、なお常に或る種の物足りなさを感じていた。それは、独りではとうてい背負い切れない経済学史上の諸問題について、同学の士と共に時間をかけてじっくりと話し合う機会を、これらの学会は必ずしも与えてくれなかったからである。これが、本書の本文のはじめにあるように、終戦後昭和二十四年頃から、久保田教授と共に、経済学史学会という独立の学会を創設する運動を起こした主観的動機である。

なお、終戦後の学制改革によって経済学部或いはそれに類した学部をもつ大学が多数設立され、従って経済学史の専攻者すなわち同学の士の数が激増したことも、本学会の創立およびその後の発展を促進した客観的原因で

ある。実際、以前には経済学史を専攻する学者の数は至って少なく、従ってすこぶる広範囲にわたる経済思想または経済学説の歴史のいずれかの断面で共通の主題をもつ学者が集まって、研究発表をしたり討論をしたりするといったようなことは、ほとんど不可能に近かかった。ところが、近頃では、例えば重商主義とか重農主義とかいう主題についてそれぞれの研究者を別々に集めようとすれば、たちまち十数名の同志をうることができるほどになっている。これは、学史の研究が非常に深まったことの証拠であると共に、こういった専門家を網羅する独立の学会の存在を意味づけるものでなければならない。

創立十周年をすませたわが学会は、会員数も当初の数倍に上り、また各会員の研究もいよいよ広く且つ深くなりつつあって、まことに今昔の感にたえない次第であるが、さらに会員諸氏の協力をえて、今後の一層の充実を期したいものである。

昭和三六年二月五日

附録 I

第九回大会（昭和二九年）で選出された役員

代表幹事　久保田明光

幹　事（○印は常任幹事）

○久保田明光、○大塚金之助、○岸本誠二郎、○堀経夫、○越村信三郎、○遊部久蔵、○横山正彦、出口勇蔵、久留間鮫造、高島善哉、小林昇、舞出長五郎、大道安次郎、平瀬巳之吉、野村兼太郎、坂本弥三郎、内田義彦、大河内一男、白杉庄一郎、水田洋（以上二〇名）

監　事　上田辰之助、徳増栄太郎

（日本経済学会連合評議員　大塚、堀幹事
経済学研究連絡委員会委員　大塚幹事）

第一三回大会（昭和三一年）で選出された役員

代表幹事　久保田明光

幹　事（○印は常任幹事）

○久保田明光、○岸本誠二郎、○大塚金之助、○堀経夫、○大河内一男、野村兼太郎、○遊部久蔵、○横山正彦、出口勇蔵、久留間鮫造、高島善哉、小林昇、舞出長

五郎、大道安次郎、平瀬巳之吉、石原忠男、内田義彦、白杉庄一郎、越村信三郎、水田洋（以上二〇名）

監　事　上田辰之助、徳増栄太郎
（日本経済学会連合評議員　久保田明光、越村信三郎
経済学研究連絡委員会委員　大塚金之助）

第一七回大会（昭和三三年）で選出された役員

代表幹事　堀経夫

幹　事（○印は常任幹事）
○堀経夫、○久保田明光、○遊部久蔵、大道安次郎、出口勇蔵、平瀬巳之吉、石原忠男、○小林昇、○岸本誠二郎、○大塚金之助、○横山正彦、越村信三郎、水田洋、長州一二、大河内一男、白杉庄一郎、舞出長五郎、高木暢哉、高島善哉、内田義彦（以上二〇名）

監　事　関未代策、徳増栄太郎
（日本経済学会連合評議員　久保田明光、越村信三郎
経済学研究連絡委員会委員　大塚金之助）

附　録　Ⅱ　経済学古典書展示明細

1. 第2回大会（京都大学）の展示目録　（排列：年代順）

Luther, M.: Von Kauffshandlung und Wucher, Vuittemberg, 1524. (Bücher)(320)

(Les) Six livres de la republique de J. Bodin Angeuin, Paris, 1577. (192)

Bodin, J.: (Les) Six livres de la republique de Jean Bodin, Geneve, 1629. (125)

Hobbes, Thomas: Elemens philosophiques du citoyen, Amsterdam, 1649. (334)

Mun, T.: England's treasure by forraign trade. London, 1664. (84)

Hobbes, Thom.: Elemente philosophica de cive, Amsterodami, 1669. (332)

Cumberland, R.: De legibus naturae dicuisitio philosophiea, London, 1672. (56)

(Child, J.): A treatise, London, 1681. (61)

Petty, *Sir* W.: Political arithmetick, London, 1691. (138)

(Davenant, C.): An essay upon ways and means of supplying the war, London, 1695. (33)

Barbon, N.: Discourse concerning coining the new money lighter, London, 1696. (126)

(Locke, J.): Some considerations of the consequences of the lowering of interest and raising the value of money, London, 1696. (196)

Child, J.: A new discourse of trade, London, 1698. (1)

Davenant, C.: Discourses on the public revenues, and on the trade of England, Pt. 2, London, 1698. (98)

(Davenant, C.): An essay upon the probable methods of making a people gainers in the ballance of trade, London, 1699. (124)

(Law, J.): Money and trade; considered with a proposal, Edinb., 1705. (5)

Mun, T.: England's treasure by foreign trade, London, 1713. (127)

Petty, *Sir* W.: Sir William Petty's political survey of Ireland, 2. ed., London, 1919. (100)

Savary, J.: Le parfait negociant, ou Instruction generale pour ce qui regarde le commerce, Tome 1, Amsterdam, 1726. (Mayr)(243)

(Hutcheson, F.): An essay on the nature and conduct of the passions and affections, London, 1728. (95)

(Mandeville): The fable of the bees: or, Private vices, public benefits, 5. ed., London, 1728. (10)

(Hutcheson, F.): An inquiry into the original of our ideas of beauty and virtue, 3. ed., London, 1729. (96)

Child, J.: A new discourse of trade, Glasgow, 1751. (Bücher)(301)

Law, J.: Proposal and reasons for constituting a council of trade in Scotland, Glasgow, 1751. (2)

Hume, D.: Political discourses, Edinb., 1752. (94)

(Wallace, R.): A dissertation on the numbers of mankind in ancient and modern times, 1753. (45)

Petty, *Sir* W.: Several essays in political arithmetick, 4. ed., London, 1755. (101)

Montesquieu, M. de: Esprit des lois, Tome 1–3, Amsterdam, 1758. (339)(338)(340)

(Franklin, B.): The interest of Great Britain considered, with regard to her colonies, 2. ed., London, 1761. (111)

(The) History of our customs,.... from William the Conqueror, to the present year MDCCLXI, Pt. 1, London, 1761. (66)

(Mirabeau, V. R.): Théorie de l'impot, 1761. (Mayr)(252)

Süssmilch, J. P.: Die göttliche Ordnung in den Veränderungen des menschlichen Geschichts, Tl. 2, Berl., 1765. (Bücher)(326)

Ferguson, A.: An essay on the history of civil society, Edinb., 1767. (Bücher)(296)

Mably, (Gabriel Bonnet de): Entretiens de phocion, sur le rapport de la morale avec la politique, Amsterdam, 1767. (336)

Steuart, *Sir* J.: An inquiry into the principles of political economy; being an essay on the science of domestic policy in free nations, Vol. 1–2, London, 1767. (190)(191)

Mirabeau, M.: A système de la nature, Ft. 1–2, London, 1770. (87)(88)

(Young, A.): The expediency of a free exportation of Corn at this time, London, 1770. (17)

(Young, A.): A six months tour through the North of England, Vol. 1–4, London, 1770. (132)(133)(134)(135)

(Young, A.): The farmer's tour through the East of England, Vol. 1–4, London, 1771. (29)(32)(31)(30)

(Young, A.): The farmer's letters to the landlords of Great Britain, Vol. 1–2, London, 1771. (206)(205)

(Young, A.): Proposals to the legislature for numbering the people, London, 1771. (36)

Hume, D.: Essays and treatises on several subjects, Vol. 1–2, New ed., London, 1772. (230)(231)

Steuart, *Sir* J.: The principles of money applied to the present state of the coin of Bengal, 2. ed., 1772. (78)

Süssmilch, J. P.: Die göttliche Ordnung in den Veränderungen des menschlichen Geschichts, Tl. 1–3, Berl., 1775–6. (115)(116)(57)

Smith, A.: An inquiry into the nature and causes of the wealth of nations, Vol. 1–3, Dublin, 1776. (73)(74)(75)

Smith, A.: An inquiry into the nature and causes of the wealth of nations, Vol. 1–2, London, 1776. (179)

Smith, A.: An inquiry into the nature and causes of the wealth of nations, Vol. 1–2, London, 1778. (176)(177)

Necker, *Herrn.*: Rechnung von seiner Finanzverwaltung St. Majestat dem König von Frankreich, Berl., 1781. (77)

Rousseau, J. J.: Oeuvres completes, Tome 2, Deuxponts, 1782. (Mayr)(253)

Necker, M.: De l'administration des finances de la France, Tome 1–3. (Mayr)(245)(246)

Smith, A.: Additions and corrections to the first and second editions of Adam Smith's Inquiry into the nature and causes of the wealth of nations, London, 1784. (164)

Anderson's A historical and chronological deduction of the origin of commerce, Vol. 1–4, London, 1787–89. (212)(213)(214)(215)

Young, A.: Agriculture, the primary interest of Great Britain, Edinb., 1788. (137)

Fischer, F. C. J.: Geschichte des teutschen Handels, Tl. 3, Hannov., 1791. (109)

Ferguson, A.: Principles of moral and political science, Vol. 1–2, Edinb., 1792. (187)(188)

Fischer, F. C. J.: Geschichte des teutschen Handels, Tl. 4, Hannov., 1792. (110)

Stewart, D.: Elements of the philosophy of the human mind, Lond., 1792. (183)

Godwin, W.: An inquiry concerning political justice, Vol. 1–2, London, 1793. (181)(182)

(The) History of the poor, Vol. 1, London, 1793. (139)

Paine, T.: Prospects on the war and paper currency, London, 1793. (102)

Smith, A.: The theory of moral sentiments, New ed., Vol. 1–2 (in 1), Basil, 1793. (16)

Ruggles, Tho.: The history of the poor, Vol. 2, London, 1794. (62)

Young, A.: Travels during the years 1787, 1788, & 1789, 2. ed., Vol. 1–2, London, 1794. (207)(208)

Smith, A.: Essays on philosophical subjects, London, 1795. (79)

(Malthus, T. R.): An essay on the principle of population, London, 1798. (43)

Laplace, P. S.: Mechanik des Himmels, Übers. von J. C. Burckhardt, Tl. 1–2, Berl., 1800–02. (Mayr)(260)

Malthus, T. R.: An essay on the principle of population, New ed., London, 1803. (180)

Lauderdale, *Earl of*: Observations by the Earl of Lauderdale, on the Review of his inquiry into the nature and origin of public wealth, Edinb., 1804. (6)

Malthus, T. R.: An essay on the principle of population, Vol. 1–2 (in 1), 3. ed., London, 1806. (106)

Smith, A.: An inquiry into the nature and causes of the wealth of nations, Vol. 1–3, London, 1811. (237)

Ricardo, D.: Proposals for an economical and secure currency, London, 1816. (144)

Malthus, T. R.: Additions to the fourth and former editions of an essay on the principle of population, London, 1817. (218)

Ricardo, D.: On the principles of political economy, and taxation, London, 1817. (104)

Bentham, J.: Defence of Usury; shewing the impolicy of the present legal restraints on the terms of pecuniary bargains, 4. ed., London, 1818. (122)

Owen, R.: Two memorials on behalf of the working classes, London, 1818. (82)

Godwin, W.: Of population; an enquiry concerning the power of increase in the numbers of mankind, London, 1820. (7)

Malthus, T. R.: Principles of political economy, London, 1820. (219)

Torrens, R.: An essay on the production of wealth, London, 1821. (147)

Owen, R.: Report of the proceedings at the several public meetings, held in Dublin, Dublin, 1823. (119)

Saint-Simon: Catéchisme des industriels, Cahier 1–3 (in 1), Paris, 1823–24.

Tooke, T.: Thoughts and details on the high and low prices of the last thirty years, Pt. 1, London, 1823. (89)

Euleri, L.: Institutionum ealculi integraliss, Vol. 1–3, Petropoli, 1824–27. (Mayr)(274)(275)(276)

Ricardo, D.: Plan for the establishment of a national bank, London, 1824. (145)

Owen, R.: Report to the county of Lanark, of a plan for relieving public distress and removing discontent, London, 1832. (Bücher)(303)

Rau, K. H.: Grundsätze der Finanzwissenschaft, Abt. 1, Heidelberg, 1832. (Mayr)(256)

Owen, R., *ed.*: The crisis; or the change from error and misery, to truth and happiness, 1832, London, 1833. (167)

Quetelet, A.: Sur l'homme et le developpement de ses facultes, ou essai de Physique sociale, Tome 1–2, Paris, 1835. (141)(142)

Senior, N. W.: Statement of the provision for the poor and of the condition of the labouring classes in a considerable portion of America and Europe, London, 1835. (39)

Smith, A.: An inquiry into the nature and causes of the wealth of nations, complete in 1 vol., Edinb., 1838. (146)

(The) New moral world, Vol. 5–7, London, 1839. (172)(173)(174)

Saint-Simon, C.-H. de: Oeuvres choisies de C.-H. de Saint-Simon, Tome 1, Bruxelles, 1839. (37)

(The) New moral world, Vol. 1–3, London, 1840–41. (209)(210)(211)

Engels, Fr.: Die heilige Familie, oder, Kritik der kritischen Kritik von Friedrich Engels und Karl Marx, Frankf. a.M., 1843. (18)

Smith, A.: An inquiry into the nature and causes of the wealth of nations, complete in 1 vol., Edinb., 1843. (55)

Hildebrand, B.: Die Nationalökonomie der Gegenwart und Zukunft, Bd. 1, Frankfurt a.M., 1848. (Bücher)(323)

Proudhon, P.: Qu'est-ce que la propriète? Premier mémoire, Paris, 1848. (Bücher)(307)

Quetelet, A.: Du système social et des lois qui le regissent, Paris, 1848. (Bücher)(298)

Knies, C. G. A.: Die Statistik als selbstständige Wissenschaften, Kassel, 1850. (Mayr)(248)

(Marx, K.): Enthüllungen über den Kommunisten-Prozess zu Köln, 1853. (Bücher)(308)

Marx, K.: Zur Kritik der Politischen Oekonomie, Ht. 1, Berl., 1859. (35)

McCulloch, J. R.: An article, practical and theoretical, on taxation, Edinb., 1860. (163)

Marx, K.: Le capital, Paris, 1876. (185)

Marx, K.: (Das) Kapital, Bd. 1, Hamburg, 1867. (227)

Marx, K.: (Das) Kapital, Bd. 1, Hamburg, 1867. (226)

Marx, K.: Das Kapital; Kritik der politischen Oekonomie, Bd. 1. 2., verb. Aufl., Hamburg, 1872. (8)

Marx, K.: Das Kapital; Kritik der politischen Oekonomie, Bd. 1. 2., verb. Aufl., Hamburg, 1872. (Bücher)(310)

Marx, K.: The eastern question, Lond., 1877. (105)

Marx, K.: Das Kapital; Kritik der politischen Oekonomie, Bd. 2, Hamb., 1885. (20)

Marx, K.: Das Kapital: Kritik der politischen Oekonomie, Bd. 3, Tl. 1, Hamb., 1894. (21)

Marx, K.: Das Kapital; Kritik der politischen Oekonomie, Bd. 3, Tl. 2, Hamb., 1894. (22)

Pareto, V.: Cours d'économie politique, Tome 1, Lausanne, 1896. (Mayr)(240)

Senior, N. W.: Reviews of the waverley novels from Rob Roy to the chronicles of the canongate. (40)

2. 第4回大会（関西学院大学）の展示目録

Robert Owen & Ricardian Socialists

1. A new view of society: or, Essays on the principle of the formation of the human character, and the application of the principle to practice (Essay First), 1813.

2. A new view of society: Essays on the formation of the human character preparatory to the development of a plan for gradually ameherating the condition of mankind, 1816.

3. A new view of society: or, Essays on the formation of the human character preparatory to the development of a plan for gradually ameherating the condition of mankind, 1817.

4. An address delivered to the inhabitants of New Lanark, on the First of January, 1816, at the opening of the institution established for the formation of character (3rd Edition), 1817.

5. No. 1. New view of society, Extracted from the London Daily newspapers of the 30th of July and the 9th and 11th of August, 1817.

6. No. 2. New view of society, Mr. Owen's report to the committee of the Association for the relief of the manufacturing and labouring poor, 1817.

7. Mr. Owen's plan: or some calculations relative to Mr. Owen's plan for the relief of Ireland, 1819.

8. Report to the county of Lanark, of a plan for relieving public distress, and removing discontent, by giving permanent, productive employment, to the poor and working classes;....., 1821.

9. Report of the proceedings at the several public meetings, held in Dublin, 1823.

10. The first discourse on a new system of society; as delivered in the Hall of Representatives, at Washington, in the presence of the President of the United States, the president elect, heads of departments, members of Congress, etc., 1825.

11. Address of Mr. Owen to the Agriculturists, Mechanics, manufacturers, both Masters & Operatives, of Great Britain and Ireland, 1827.

12. Debate on the evidences of christianity; containing an examination of the social system, and of all the systems of scepticism of ancient and modern times....., 1839.

13. The addresses of Robert Owen, preparatory to the development of a practical plan for the relief of all classes, without injury to any, 1830.

14. Lectures on an entire new state of society; comprehending an analysis of British Society, relative to the production and distribution of wealth; the formation of character; and government, domestic and foreign, 1830.

15. Outline of the rational system of society, founded on demonstrable facts, developing the constitution and laws of human nature; being the only effectual remedy for the evils experienced by the population of the world, 1838.

16. Outline of the rational system of society, founded on demonstrable facts, developing the constitution and laws of human, nature; Being the only effectual remedy for the evils experienced by the population of the world, (authorized ed.), 1840.

17. The Crisis (4 vols.), 1832–1834.

18. Six lectures on charity, delivered at the Institution of New Lanark, upon the thirteenth chapter of the first epistle to the Corinthians, (1840?).

19. The catechism of the new Moral World, 1838.

20. A Dialogue, in three parts, between the founder of "The Association of All Classes of All Nations" and a stranger desirous of being accurately informed, respecting its origin and objects, 1838.

21. To the working classes. Competitive versus co-operative labour; or labour as it is, and labour as it ought to be, 1835.

22. The Book of the New Moral World, (7 parts), 1842.

23. The Social Bible, being an outline of the rational system of society, founded on demonstrable facts, developing the constitution and laws of human character, 1840.

24. Report of the proceedings of the public discussion, between Mr. Owen and the Rev. J. H. Roebuck, 1837.

25. Public discussion, between Robert Owen, late of New Lanark, and the Rev. J. H. Roeback, of Manchester, (Revised ed.), 1837.

26. Six lectures delivered in Manchester previously to the discussion between Mr. Robert Owen and the Rev. J. H. Roebuck, 1839.

27. A development of the origin and effect of moral evil, and of the principles and practices of moral good....., 1838.

28. Report of the discussion between Robert Owen, Esq., and the Rev. W. M. Legg, B. A., which took place in the Town Hall, Reading, March 5 & 6, 1839, on Mr. Owen's new views of society, 1839.

29. Robert Owen on marriage, religion, & private property, and on the necessity of immediately carrying into practice the "Rational System of Society," to prevent the evils of a physical revolution, 1839.

30. Public discussion between John Brindley and Robert Owen, on the questions, "What is Socialism; and What would be its Practical Effects upon Society?" held in the Amphitheatre, Bristol,....., 1841.

31. "What is Socialism" and What would be its Practical Effects upon Society? A correct report of the public discussion between Robert Owen and Mr. John Brindley, held in Bristol,....., 1841.

32. Syllabus of Four Mornings and four evenings courses of Lectures, at the Egyptian Hall, Piccadilly,....., 1841.

33. A development of the Principles and Plans on which to establish Self-supporting Home Colonies; as a most secure and profitable Investment for Capital,....., 1841.

34. The Signs of the Times; or the Approach of the Millennium, 1841.

35. Address of the Special Congress assembled in London, July 1842, to the members and friends of Rational Society, 1842.

36. Manifesto of Robert Owen to the Civilized World: A Solution of the Great Problem of the Age, 1847.

37. To the Electors of Borough of Marylebone, 1847.

38. Dialogue entre La France, Le Monde et Robert Owen, sur La Nécessité D'un Changement Total dans Nos Systèmes D'Éducation et de Gouvernement, 1848.

39. Owen's Universal Revolution With Supplement, 1849.

40. Robert Owen's Journal, (4 vols.), 1851–52.

41. Robert Owen's Tracts for the World's Fair, 1851.

42. Robert Owen's Rational Quarterly Review, and Journal Vol. 1, 1853.

43. The Future of the Human Race; or a Great, Glorious, and Peaceful Revolution, Near at Hand, to be effected through the Agency of Departed Spirits of Good and Superior Men and Women, 1853.

44. The New Existence of Man upon the Earth, (Part V), 1854.

45. Robert Owen's Millennial Gazette, (1856–1858), Nos. 1 & 11, Nos. 13 & 14.

46. Robert Owen's Congress of Advanced Minds, Seventh day, Tuesday, May 19th, 1957.

47. Report of the Meeting and Entire Proceedings of the Congress of Advanced Minds of the World, which took place in St. Martin's Hall, Long Acre,..... London, from 12th to the 25th of May, 1857.

48. The Life of Robert Owen. Written by himself, with selections from his writings and correspondence, volume I, 1857.

49. A Supplementary appendix to the First volume of the Life of Robert Owen, Containing a series of reports, addresses, memorials, and other documents, referred to in that volume, 1858.

50. Robert Owen's Announcement to the Population of the World, of that which is to arise gradually, in peace and order, by the natural progress of the development of the rational faculties of mankind, before the termination of the present century, (Year ?).

51. Hall, Charles, An Enquiry into the Cause of the Present Distress of the People (2nd ed. of "The Effects of Civilization on the mass of the people), 1820.

52. Thompson, William, An Inquiry into the Principles of the Distribution of Wealth most conducive to Human Happiness; applied to the newly Proposed System of Voluntary Equality of Wealth, 1824.

53. Ibid., A New Edition by William Pare, 1850.

54. Thompson, William, Appeal of One Half the Human Race, Women, Against the Pretensions of the other Half, Men, to retain them in political, and thence in civil and domestic, slavery; In reply to a paragraph of Mr. Mill's celebrated "Article on Government," 1825.

55. Thompson, William, Labor Rewarded. The Claims of Labor and Capital conciliated; or, How to secure to labor the whole products of its exertions, 1827.

56. Gray, John, A Lecture on Human Happiness; etc., 1825 (Reprint 1931).

57. Gray, John, The Social System: a treatise on the Principle of Exchange, 1831.

58. Gray, John, An Efficient Remedy for the Distress of Nations, 1842.

59. Gray, John, Lectures on the Nature and Use of Money, 1848.

60. Hodgskin, Thomas, Travels in the North of Germany, describing the Present State of the Social and Political Institutions, the Agriculture, Manufactures, Commerce, Education, Arts and Manners in the Country, 2 vols., 1820.

61. Bray, J. F., Labour's wrongs and labour's remedy; or the age of might and the age of right, 1839.

62. Edmonds, T. R., Practical moral and political economy; or the government, religion, and institutions, most conducive to individual happiness and to national power, 1828.

3. 第5回大会（慶応義塾大学）の展示目録

A. 人口学説関係

(イ) 17～18世紀

1) Botero, Giovanni: Raison gouvernement d'état en dix livres. Paris, 1599. (tr. par G. Chappuys).

2) Berkeley, George: A / Miscellany, / containing / several tracts / on / various subjects; / Querist. etc., Dublin, 1752.

3) Cantillon, Richard: Essai / sur la Nature / du /Commerce / en general, / London, 1755.

4) Chalmers, George: An / Estimate / of the / comparative strength / of / Great-Britain, / during the / present and four preceding reigns; / and of the /losses of her trade / from every war / since / the Revolution. / London, 1786.

5) Child, Sir Josiah: A new / Discourse / of / Trade, / wherein is recommended several / weighty points relating to companies of merchants, / the act of navigation, / naturalization of strangers, / and our woolen manufactures, / the ballance of trade, / and the nature of plantations, and their conse- / quences in relation to the kingdom, / are seriously discussed, / and some proposals for erecting a court of merchants for determining controversies, relating / to maritime affairs, and for a law for trans- / ferrance of bills of Debts, are humbly / offered. London, 1693.

6) Child, Sir Josiah: A new / Discourse / of / Trade; / wherein are recommended / several weighty points; / relating to / Com- panies of merchants. / The act of navigation, natu- / ralization of stranger, and / our woolen manufactures. / The /ballance of trade, and na- / ture of plantation; with their consequences, in rela- / tion to the kingdom, are se- / riously discussed. / Methods for the employment / and maintenance of the poor / are proposed. / The reduction of interest of / money to 4. L. per / cent is / recommended. / And some proposals for erec- / ting a court of merchants / for determining controver- / sies, relating to maritime af- / fairs, and for a law for trans- / ferring of bills of debts, are / humbly offered. / To which is added, / a small treatise against usury. / 5. ed., Glasgow, 1751.

7) Condorcet, Marquis: Esquisse / d'un / tableau historique / des progrès de l'esprit humain, / 4. ed., Paris, 1798.

8) Defoe, Daniel: A / Plan / of the / English Commerce, / being a / Compleat prospect / of / the trade of this nation, as well the / home trade as the foreign. / London, 1728.

9) Ferguson, Adam: An / Essay / on the / History / of / civil society, / 3. ed., corrected. / London, 1786.

10) Fenelon, François de: The / Adventures / of / Telemachus, / the son of Alysses. / London, 1819. (Transl. by J. Hawkesworth)

11) Genovesi, Antonio: Delle / Lezioni / di commercio / o sia / d'economie civile. / Milano, 1768.

12) Godwin, William: An / Enquiry / concerning / Political Justice, / and / its influence / on / general virtue and happiness, / 2 vols., Dublin, 1793.

13) Godwin, William: The / Enquirer. / a new edition. / Edinburgh, 1823. (1. ed., Lond., 1797).

14) Graunt, John: Natural and Political / Observations / mentiond in a following Index, / and made upon the / Bill of Mortality. / With reference to the government, religion, trade, / growth, ayre, diseases, and the several changes of the / said city. / London, 1662.

15) Herrenschwand: De / l'économie politique / moderne. / discours fondamental / sur / la population. / Paris, 1794.

16) Hume, David: Political Discourses, 1752.

17) Hornegk, Philipp Wilhelm von: Oesterreich / ueber alles wann es nur will. 1684.

18) Justi, Johann Heinrich Gottlobs von: Staatswirtschaft / oder / Systematische Abhandlung / aller Oekonomischen und Kameral- / Wissenschaften, / die zur Regierung eines Landes erfordert werden. / 2. Bde., Leipzig, 1758.

19) Le Trosne, M.: De l'ordre / social, / ouvrage suivi d'un traité élémentaire / sur la valeur, l'argent, la circulation, / l'industrie & le commerce intérieur / & extérieur. / Paris, 1777.

20) Necker, Jaques: Sur / la législation / et le commerce / des grains. / 2. ed., Paris, 1775.

21) Paley, William: The / Principles / of / moral and political / Philosophy. / 18. ed., 2 vols., London, 1810 (1. ed., 1785).

22) Petty, Sir William: Several / Essays / in / Political / Arithmetick: / the titles of which follow in the enpuing pages. / London, 1699.

23) Petty, Sir William: Essays / in / Political Arithmetick; / or, a / discourse / concerning / the extent and value of lands, people, / buildings; husbandry, manufacture, com- / merce, fishery, artizans, seamen, soldiers; / publick revenues, interest, taxes, super- / lucration, registries, banks; valuation of men, increasing of seamen, of militia's, / harbours, situation, shipping, power at / sea, &c. As the same relates to every / country in general, but more particularly / to the Territories of her Majesty of Great / Britain, and her neighbours of Holland, / Zealand, and France. London, 1711.

24) Price, Richard: Observations / on the Nature of / Civil Liberty, / the principles of / government, / and the justice and policy / of the war with America. / To which are added an appendix and postscript, / containing a state

of the national debt, an / estimate of the money drawn from the public / by the taxes, and an account of the national income and expenditure since the last war. / 6. ed., London, 1776.

25) Steuart, James: An / Inquiry / into the / Principles of Political Oeconomy: / being an / essay on the science / of / domestic policy in free nations, / in which are particularly considered / population, agriculture, trade, industry money, coin interest, circulation, banks, / exchange, public credit, and taxes. / 2 vols., London, 1767.

26) Suessmilch, Johann Peter: Die / goettliche / Ordnung / in den Veraernderungen / des menschlichen Geschlechts, / aus / der Geburt, dem Tode / und der Fortpflanzung. 2 Bde., Berlin, 1761.

27) Temple, Sir William: Miscellanea. / 2. ed., London, 1681.

28) Wallace, Robert: A / Dissertation / on the / Numbers of Mankind / in ancient and modern Times: / in which / the superior populousness of antiquity is / maintained. / With / an appendix, / containing additional observations on the / same subject, / and / some remarks on Mr. Hume's Political Discourse, of / the Populousness of ancient Nations. / Edinburgh, 1753.

29) Young, Arthur: Proposals / to the / legislature / for / Numbering the People, / containing / some observations on the population / of Great Britain, and a sketch of the / advantages that would probably accrue / from an exact knowledge of its present state. / London, 1771.

30) Young, Arthur: Political Arithmetic, / containing / observations / on the present state of / Great Britain; / and the / principles of her policy / in the encouragement of agriculture, / addressed to the / oeconomical societies established in Europe. / To which is added, / a memoir on the corn trade; / drawn up and laid before the commissioners / of the Treasury, / by Governor Pownall. / London, 1774.

31) Davenant, C: An / Essay / upon the / Probable Methods / of making a / People Gainers / in the / Ballance of Trade, / treating of these heads, viz. / of the people of England. / Of the land of England, and its product. / Of our payments to the publick, and in what man- / ner the ballance of trade may be thereby affected. / That a country cannot increase in wealth and / power but by private men doing their duty to / the publick, and but by a steady course of ho- / nesty and wisdom, in such as are trusted with / the administration of affairs. London, 1699.

32) Young, Arthur: Travels, / during the years 1787, 1788, and 1789, / undertaken more particularly / with a view of ascertaining / the / cultivation, wealth, resources, / and national prosperity, / of the / kingdom of France./ 2. ed., 2 vols., London, 1794.

（ロ） マルサス人口論各版及び翻訳

33) Malthus, Thomas Robert: An / Essay / on the / Principle of Population, / as it affects / the future improvement of society, / with remarks / on the speculations of Mr. Godwin, / M. Condorcet, / and other writers, / London, 1798.

34) ——: An Essay / on the / Principle of Population: / or, / a view of its past and present effects / on / human happiness; / with an inquiry into our prospects respecting the future removal / or mitigation of the evils which it occasions. / a new edition, very much enlarged, / London, 1803.

35) ——: An Essay / on the / Principle of Population: / or, a / view of its past and present effects / on / human happiness / with / an inquiry into our prospects respecting the future removal or mitigation of the evils which it occasions. / 3. ed., 2 vols., London, 1806.

36) ——: An Essay / on the / Principle of Population: / .... 4. ed., 2 vols., London, 1807.

37) ——: An Essay / on the / Principle of Population: / ....5. ed., 3 vols., London, 1817.

38) ——: Additions / to the / Fourth and Former Editions / on / An Essay / on the / Principle of Population, / &c. &c. / London, 1817.

39) ——: An Essay / on the / Principle of Population: / .... 6. ed., 2 vols., London, 1826.

40) ——: Versuch / ueber die / Bedingung und die Folgen / der / Volksvermehrung: uebers, Von Hegewisch, 2 Bde., Altona, 1807.

41) ——: Recherches / sur / la Population, / et / sur la faculte / d'accroissement de l'espèce humaine; / contenant / une réfutation des doctrines de M. Malthus / sur cette matière / par William Godwin, / tr. par Constancio, 2 tomes, Paris, 1821.

42) ——:Essai sur le principe du Population, / tr. par Pierre Prevost. 2. ed., 4 Tomes, Paris, 1823.

(ハ) 19 世紀

43) Chalmers, Thomas: On / Political Economy, / in connexion with the / moral state and moral prospects / of / society, / Glasgow, 1832.

44) Doubleday, Thomas: The / true law / of / Population / shewn to be connected with the / food of the people. / 2. ed., London, 1846.

45) Ensor, George: An Inquiry / concerning / the Population of Nations: / containing / a refutation of Mr. Malthus's / essay on population, London, 1818.

46) Godwin, William: Of Population. / An / Enquiry / concerning the / power of increase / in the / numbers of mankind, / being an answer to Mr. Malthus's Essay on / that subject, / London, 1820.

47) Hansen, Georg: Die / drei Bevoelkerungsstufen, / Ein Versuch, / die Ursachen fuer das Bluehen und Altern der Voelker nachzuweisen, / Muenchen, 1889.

48) Knapp, G. F.: Theorie / des / Bevolkerungs-Wechsels, / Braunschweig, 1874.

49) Moser, Ludwig: Die / Gesetze der Lebensdauer, / Nebst / Untersuchungen ueber Dauer, Fruchtbarkeit der Ehen, ueber/ Toedtlichkeit der Krankheiten, Verhaeltniss der Geschlechter / bei der Geburt, ueber Einfluss der Witterung U. S. W. / und / einem Anhang, / enthaltend die Berechnung der Leibrenten, Lebensversicherungen, / Wittwenpensionen und Tontionen, / Berlin, 1839.

50) Place, Francis: Illustrations and proofs / of the / Principle of Population: / including an examination of the / proposed remedies of Mr. Malthus, / and a reply to the / objection of Mr. Godwin / and others, / London, 1822.

51) Puynode, Gustave du: Des / lois du travail / et / de la population, / 2 tomes, Paris, 1860.

52) Quetelet, Ad.: Physique Sociale / ou / Essai sur le developpement des facultes / de l'homme / 2 tomes, Saint-Petersbourg, 1869.

53) Senior, Nassau William: An / Introductory Lecture / on / Political Economy, / delivered before the University of Oxford, / on the 6th of December, 1826, / London, 1827.

54) Senior, Nassau William: Two Lectures / on / Population, / delivered before / the University of Oxford / in / easter term, 1828, / to which is added, a / correspondence between the author / and the / Rev. T. R. Malthus, / London, 1829.

55) Sismondi, Simon de: Nouveaux principes d'économie politique, ou de la richesse des rapports avec la population, 1819.

56) Verhulst, P. F.: Recherches Mathématiques sur la Loi d'accroissement de la population, 1844.

B. 東印度会社関係（但し18世紀前半まで）（排列：年代順）

1) The / Answer / vnto the Dvtch / pamphlet, / made in defence / of the vnivst and bar- / barous proceedings against the / English at / Amboyna / in the East-Indies, by the Hol- / landers there. / Lond., 1624.

2) A trve / Declaration of / the News that came out of the East- / Indies, with the pinace called the / Hare, which arriued in Texel., / concerning / a conspiracy discovered in the island of Amboyna, / and the punishment following thereupon, according / to the course of justice, in March 1624. com- / prehended in a letter missiue; / and sent / from a friend in the Low-Countries, to a friend of note / in England, for information of him in the truth / of those passages. 1624.

3) A Trve / Relation / of the Vnivst, / Crvell, and Barba- / rovs Proceedings / against the English at / Amboyna / in the East-Indies, by the Nea- / therlandish Governovr and / Covncel there. / Also the copie of a pamphlet, set forth first / in Dutch and then in English, by some / Neatherlander; falsly entituled, / a trve declaration of the / news that came out of the East-Indies, with / the Pinace called the Hare, which ar- / riued at Texel, / Together with an Answer to the same pamphlet. / By the English East-India Companie. / the 2nd impress., / Lond., 1624.

4) The Petition / and Remonstrance / of the Governor / and Company of Merchants of / London, trading to the East-Indies, / exhibited to the honorable the House / of Commons assembled / in parliament. / Lond., 1628.

5) Newes from the East- / Indies; / or, / a voyage to Bengalla, one of the greatest / kingdoms under the High and Mighty Prince Pedesha Shassallem, usually called the / Great Mogull, / with the state and magnificence of the court of / Malcandy, kept by the Nabob Viceroy, or vice-king under the aforesayd monarch: also their / detestable religion, mad and foppish / rites, and ceremonies, and wic- / ked sacrifices and impious / customes used in / those parts. / written by William Bruton, now resident in the parish / of S. Saviours Southwark, who was an eye and eare / witnesse of these following descriptions; and / published as he collected them being resi- / dent there divers yeares: and now lately come / home in the good ship called the Hope- / wel of London, with divers merchants / of good account which are able / to testisie the same for truth. Lond., 1638.

6) A Brief Account of the / Priviledges and Immunities / granted by the / French King / to the / East-India Company, &c. of France, / for the encouraging and improving of / trade and navigation, / togather with an extract of a Declaration / which the said king hath put forth for the / encouragement of trade in general. / Lond., 1671.

7) An / Answer / to two / Letters. / concerning / the / East-India / Company. / 1676.

8) A Treatise / touching the / East-Indian Trade: / or, / a discourse (turned out of French into English) / concerning the establishment of a / French Company / for the / commerce of the East-Indies. / to which are annexed, the / articles and conditions / whereupon the said / Company for the commerce of the East-Indies / is established./ Lond., 1676.

9) The / East-India-Trade / a most / Profitable Trade / to the / Kingdom. / and / best secured and improved / in a / Company, / and a / Joint-Stock. / represented / in a letter written upon the occasion / of two letters lately published, infi- / nuating the contrary. / Lond., 1677.

10) Reasons for constituting a New East-India Company in London. Lond., 1681.

11) Philopatris: A / Treatise / wherein is demonstrated. / I. That the East-India Trade is the most national of / all foreign trades. / II. That the clamors, aspersions, and objections / made against the present East-India Com-

pany, / are sinister, selfish, of groundless. / III. That since the discovery of the East-Indies, the / dominion of the sea depends much upon the / wane or increase of that trade, and consequently / the security of the liberty, property, and / Protestant religion of this Kingdom. / IV. That the Trade of the East-Indies cannot be carried on to national advantage, in any other way / than by a general Joynt Stock. / V. That the East-India trade is more profitable and / necessary to the Kingdom of England, than to / any other Kingdom or nation in Europe. / Lond., 1681.

12) Attwood, William: An / Apology / for the / East-India Company: / with an account of some large pre- / rogatives of the crown of England, / anciently exercised and allowed of / in our law, in relation to foreign / trade and foreign parts. Lond., 1690.

13) Coke, Roger: Reflections / upon the East-Indy / and / Royal African / Companies: / with / animadversions, concerning the / naturalization of Foreigners. / Lond., 1695.

14) The Examinations and Informations upon Oath, / of / Sir Thomas Cooke, / and several other persons: / lately taken before a Committee of both Houses of Par- / liament, touching divers indirect practices, to procure by corrupt / and unlawful means, a new charter, and Act of Parliament / for the East-India Company. / as also the articles of impeachment by the honorable House of Com- / mons, against the Duke of Leeds. with his grace's answer / therunto. / 1695.

15) Cary, John: A / Discourse / concerning the / East-India Trade / shewing it to be unprofitable to the / Kingdom of England, / being taken out of / an Essay on Trade. / Lond. (reprint.) 1696.

16) Davenant, Charles: An / Essay / on the / East-India Trade. / Lond., 1696.

17) A / Letter to a / Friend, / concerning the / East-India / Trade. / Lond., 1696.

18) Papillon, Thomas: A / Treatise / concerning / the East-India-Trade: / being / a most profitable trade / to the / Kingdom, / and best secured and improved by a / Company / and / a Joint-Stock. Lond., (reprint.) 1696.

19) Proposals / for settling the / East-India / Trade. / Lond., 1696.

20) K. C.: Some / seasonable and modest / Thoughts, / partly occasioned by, and partly concerning the / Scoto East-India / Company. / humbly offered to R. H. esq.; a member / of the present Parliament. / Edinburgh, 1696.

21) Some / Reflections / on a / Pamphlet, / intituled, / England and East-India / inconsistent in their / manufactures. Lond., 1696.

22) R. C.: A / Treatise / concerning the / Regulation / of the / Coyn of England, / and how the / East-India trade may be pre- / served and encreased. / Lond., 1696.

23) Pollexfen, John: England / and / East-India / Inconsistent / in their / manufactures. / being an / answer / to a / treatise, / intituled, / an essay on the East-India trade. / Lond., 1697.

24) A / Letter / from a / Lawyer of the Inner Temple, / to / his Friend in the country, / concerning the East-India Stock, / and the / project / of uniting the / new and old companies. / Lond., 1698.

25) Cary, John: A / Discourse / concerning the / East-India Trade, / shewing how it is unprofitable to the / Kingdom of England. / being taken out of / An Essay on Trade; / to which are added/ some observations of Sir Jos. Child and of the author / of the Essay on Ways and Means relating to Trade. / and also, / a copy of the French King's decree, concerning / printed callicoes. / Lond., 1699.

26) An / Answer / to the / Case / of the / Old East-India Company; / as represented by themselves / to the Lords spiritual and temporal / in / Parliament assembled. / Lond., 1700.

27) T. S.: The / Profit and Loss / of the / East-India Trade, / stated, and humbly offer'd to the Consi- / deration of the Present / Parliament. / Lond., 1700.

28) North, Dudley: Considerations / upon the / East-India Trade. / in tantas brevi creverant opes seu maritimis, / seu terrestribus fructions, seu multitudi- / nis increments, seu sanctitate discipline. / Tit. Liv. / Lond., 1701.
terrestribus fructions, seu multitudi- / nis increments, seu sanctitate discipline. / Tit. Liv. / Lond., 1701.
29) Daniel, William: A / Journal / or / Account / of / William Daniel, / his late expedition or undertaking / to go from / London to Surrat. / in / India, / giving a short, but impartial relation of / the dangers, distresses, fatigues

and hinde- / rances, happening to him during the said ex- / pedition till his return to England. Lond., 1702.

30) Davenant, Charles: New Dialogues / upon the Present Posture of Affairs, / the Species of Mony, / National Debts, / Public Revenues, / Bank and East-India Company, / and the Trade now carried on between / France and Holland. / Vol. II. Lond., 1710.

31) Lockyer, Charles: An account of the Trade in India: containing / rules far good government in / trade, price occurants, and tables: / with descriptions of Fort St. George, A / - / cheen, Malacca, Condore, Canten, Anjenge, / Muskat, Gombroon, Surat, Gva, Garwar, / Telichery, Panola, Calicut, the cape of / Good-Hope, and St. Helena. their / inhabitants, Customs, Beligion, Govern- / ment, Animals, Fruits etc. / to which is added. / an account of the management / of the Dutch in their affairs in / India. / Lond., 1711.

32) A Brief State of the Question, / between the Printed and Painted/ Callicoes / and the / Woolen and Silk / Manufacture, / as far as it relates to the / Wearing and Using of Printed and / Painted Callicoes in Great / Britain. Lond., 1719

33) The / Advantages / of the / East-India Trade / to / England, / Consider'd. / Lond., 1720.

34) The / Interest / of England / consider'd, / with respects to its / Manufactures / and / East-India Callicoes Imported, / Printed, Painted, Stained, and Consu- / med therein. / Or, an / essay shewing from whence the decay / of trade, the melting of coin, the scarcity / of silver, the increase of poor do proceed. / Lond., 1720.

35) The / Trade to / India / critically and calmly consider'd, / and prov'd to be destructive to the / general trade of Great Britain, / as well as to the woollen and Silk / manufactures in particular. / Lond., 1720.

36) The / Freedom of Commerce / of the / Subjects of the Austrian / Nether-lands, / asserted and vindicated / being a / confutation / of the / arguments advanc'd on the part of the East and West-India / Companies of the United provinces, under colour of the 5th / and 6th articles of the Treaty of Munster. / address'd to his excellency the Marquis/ de Prie. / Done into English, from the original printed at Brussels, / Lond., 1723.

37) La vérité / du fait, du droit, / et de / l'intérêt / de tout ce qui concerne / le commerce des Indes, / établi / aux pais-bas autrichiens, / par octroi de / sa Majesté impériale / et catholique. / La Haye, 1732.

38) The / Right / which the / Privileged East-India Company / of the / United Netherlands / have to trade to the / East-Indies, / asserted / against the inhabitants of the / Spanish, now Austrian Netherlands. / Lond., 1724.

39) The / Advantages / of / Peace / and / Commerce; / with / some Remarks/ on the / East-India Trade. / Lond., 1729.

40) Copy of a Charge against Mr. Henry Lowther: as it was transmitted from Bombay, collected from an inquiry into his conduct and manage- / ment in the East-India company's service, by the president / and council of that place; which charge had been de- / livered to him there, had be not withdrawn himself from / their service. / 1737.

41) A / Letter / from a / Lady at Madrass / to her / Friends in London: / giving / an account of a visit, made by the / Governor of that place, with his lady and others, / to the Nabob (Prime Minister to the Great Mogul) and his lady etc. in which their persons, / and amazing richness of dress, are particularly / described. with some account of the manners and customs of the Moors in general. Lond., 1743.

42) The / Case / of / M. de la Bourdonnais: / in a / Letter to a Friend. / Lond., 1748.

43) Considerations / on the / Proposal / for the / Reduction / of Interest, / so far as it relates to the / East-India Company, / and on / the question to be balloted for, / at the East-India House, on wednes- / day next, the 3d of January: / with / some remarks on what past at the two / general-courts on this subject. / in a letter to the gentlmen and ladies, / proprietors of the East-India Stock, / Lond., 1749.

44) Three / Letters / to the / Proprietors of Stock / in the / East-India Company, / relative to the question / to be balloted for on Wednesday, / January 3d, 1749. / Lond., 1749.

45) A / Speech / intended to have been made at / a general court / of the / Proprietors of East-India Stock, / held at / their house in Leadenhall-street, / on / wednesday, / the 21st Day of March, 1750. / Lond., 1750.

4. 第6回大会（神戸大学）の展示目録

Bodin, I [ean]. Les six livres de la republiqve. A Lyon, 1580.

Wheeler, Iohn. A treatise of commerce: wherein are shewed the commodities arising by a well ordered and rules trade, Harison, London, 1601.

R., I. The trades increase, London, 1615.

[Digges, Dudly] The defence of trade, In a letter to Sir Thomas Smith Knight, London, 1615.

[R., I.] Sigismvndi scacciae ivriscons, Romani tractatus de commerciis, et cambio. Romae, 1619.

M., T. A discovrse of trade, from England and vnto the East-Indies, London, 1621.

[Misselden, E.] Free trade, or, The Means to make trade florish. Wherein, the causes of the decay, London, 1622.

Malynes, Gerard. The center of the circle of commerce, or, a refutation of a treatise, intituled, London, 1623.

Malynes, Gerard. Consvetvdo, vel, lex mercatoria, or, The antient law-merchant diuided into three parts, London, 1636.

Boltons, M. A short and private discourse between M. Bolton and one M. S. concerning usury, London, 1637.
The petition and remonstrance of the governor and company of merchants of London, London, 1641.

Robinson, Henry. England's safety in trades encrease, London, 1641.

Roberts, Lewes. The treasure of traffike, or, A discourse of forraigne trade, London, 1641.
A tract against the high rate of vsvrie, London, 1641.
A declaration concerning the generall accompts of the Kingdome with the true state of all the receipts and disbursements of money both by land and sea for the use of the common wealth: since the first sitting, London, 1642.

Parker, Henry. Of a free trade. A discourse seriously recommending to our nation the wonderfull benefits of trade, London, 1648.
The key of wealth: or, A new way, for improving of trade: lawfull, easie, safe and effectuall, London, 1650.
The trades-man's jewell: or, A safe, easie, speedy and effectual means, for the incredible advancement of trade, London, 1650.

Hobbes, Thomas. Le corps politiqve ov les éléments de la loy morale et civile, tr. d'Anglois en François par vn de fes amis, [n. p.] 1652.

Selden, John. Of the Dominion, or, Ownership of the Sea. Two books, written at first in Latin, and entituled, Mare Clausum seu de Moninio Maris, by John Selden, Esquire. Tr. into English; and set forth with some additional evidences and discources, by Merchant command. Lond., 1652. *With*: Dominium Maris: or, The Dominion of the Sea. expressing the title, which Venetians pretend unto the sole dominion, and absolute Sovereighnite of the Adriatick Sea, Tr. out of Italian, Lond., 1652.

Robinson, Henry. Certain proposalls in order to the peoples freedome and accommodation in some particulars, London, 1652.

Winstanley, Ferrard. The law of freedom in a platform: or, True magistracy restored, London, 1652.

[Dymorck, C.] An essay upon Mr. W. Potters designe concerning Bank of Lands to be erected throughout this Common-Wealth, London, [~~1~~653].

Maddison, Ralphe. Great Britains remembrancer, looking in and out. Tending to the increase of the monies of the commonwealth, London, 1655.

Violet, Tho. Proposals humbly presented to his Highness Oliver Lord Protector of England, etc. and to the High Court of Parlament, now assembled.. with several reasons for the doing thereof, and waies how it may be exactly done, London, 1656.

An abridgement of the statutes in force and use, made in the 16th, 17th, and 18th years of the Reign of K. Charles the First, London, 1665.

Omnia comesta a belo, or, an answer out of the West to a question out of the North, [n. p.] 1667.

[Child] A short addition to the observations concerning trade and interest of money, by the same Hand, London, 1668.

[Chamberlayne] Englands wants: or, Several proposals probably beneficial for England, humbly offered to the consideration of all Good Patriots, London, 1668.

Interest of money mistaken, or A Treatise, proving, that the abatement of interest is the effect and not the cause

of the riches of a nation, London, 1668.

Culpeper, Tho. A discourse, shewing the many advantages which will accrue to this kingdom by the abatement of usury, London, 1668.

[Culpeper] A short appendix to a late treatise concerning abatement of usury, London, 1668.

C[hild], J. Brief observations concerning trade, and interest of money, London, 1668.

England's interest asserted, in the improvement of its native commodities, by a true Lover of His Majesty, and Native Country, London, 1669.

Coke, Roger. A discourse of trade. In two parts, London, 1670.

Culpeper, Thomas. The necessity of abating usury re-asserted; in a reply to the discourse of Mr. Thomas Manly entituled, Usury at six per Cent, London, 1670.

Coke, Roger. A discourse of trade. In two parts, London, 1670.

The royal fishing revived.. humbly offered to the consideration of the King and Parliament, London, 1670.

C., W. England's interest by trade asserted, shewing the necessity and excellency thereof, London, 1671.

Coke, Roger. A treatise wherein is demonstrated, that the Church and Trade of England, are in equal danger with the trade of it, Treatise I, London, 1671.

Les us et coutumes de la mer, A Rouen, 1671.

Leigh, Edward. Three diatribes, or, Discourses, London, 1671.

Fortrey, Samuel. England's interest and improvement, London, 1673.

Plain English, in a familiar conference, betwixt three friends, Rusticus, Civis, and Veridicus, London, 1673.

The grand concern of England explained; in several proposals, London, 1673.

Trevers, Joseph. An essay to the restoring of our decayed trade, London, 1675.

Coke, R. England's improvements, In two parts, Treatise III, London, 1675.

[Petty, W.] A treatise of taxes and contributions, London, 1679.

Petty. Sir William Petty's quantulumcunque concerning money, 1682. [n. t.-p.]

[Child] A treatise, wherein is demonstrated, London, 1681.
An historical and political discourse of the laws & government of England, London, 1682.

Petty, William. Political arithmetick, or, A Discourse, London, 1691.
An account of several new inventions and improvements now necessary for England, in a discourse by way of letter to the Earl of Marlbourgh, London, 1690.

George, Captin. England's safety: or, A Bridle to the French King, London, 1693.

B., J. A discourse on the late funds of the million-act, lottery-act, and Bank of England, London, 1694.

Child, Josiah. A new discourse of trade, where is recommended several weighty points relating to companies of Merchants, 2. ed., Lond., 1694.
Reports containing an essay for the amendment of the silver coins, London, 1695.

Lowndes, W. Some remarks on a report containing an essay for the amendment of the silver coins, London, 1695.
A discourse of the general notions of money trade, and exchanges, as they stand in relation each to other, attempted by way of aphorism, London, 1695.
England's great interest, by encouraging the setting up the Royal fishery within the British Seas, London, 1695.
A letter from an English merchant at Amsterdam to his friend at London, concerning the trade and coin of England, London, 1695.

Houghton, Thomas. Dueope's glory: or, Peace and plenty to the people thereof, London, 1695.
A report containing an essay for the amendment of the silver coins, London, 1695.

[Davenant, Charles]. An essay upon ways and means of supplying the war, [n. p.] 1695.
Considerations requiring greater care for trade in England and some expedients proposed, London, 1695.

U., A. An essay, for regulating of the loyn, London, 1696.

Pratt, Samuel. The regulating silver coin, made practicable and easie, to the government and subject, London, 1696.

[Briscoe] A Discourse of money; being an essay on that subject, London, 1696.

[Davenant] An essay on the East-India-Trade, London, 1696.

Bellers, John. Proposals for raising a colledge of industry of all useful trades and husbandry, with profit for the rich, a plentiful living for the poor, London, 1696.

Barbon, Nicholas. A discourse concerning coining the new money lighter. In answer to Mr. Lock's considerations about raising the value of money, London, 1696.

Some reflections on a pamphlet, intituled, England and East India inconsistent in their manufactures, London, 1696.

Deous and Tutmen: or, Our new money as now coined, in full weight and fineness, London, 1696.

The groans of the poor the misery of traders and the calamity of the publick, London, 1696.

A book of funds: or, Some reasonable projections and proposals for raising three millions of money per annum for supplies, to be granted His Majesty, London, 1696.

Discourse about our keeping our money, London, 1696.

A discourse of trade, coyn, and paper credit: and of ways and means to gain, and retain riches, to which is added the argument of a learned counsel, London, 1697.

A short treatise of the reason and cause why our money and bullion have been exported, for many years last, with the way to prevent it for the future and make money more plentiful, London, 1697.

England and East-India inconsistent in their manufactures, London, 1697.

A discourse of trade and coyn, London, 1697.

An essay upon the probable methods of making a people gainers in the ballance of trade, by the author of the Essay on ways and means, London, 1699.

An essay upon the probable methods of making a people gainers in the ballance of trade, London, 1699.

Bellers, John. Essays about the poor manufactures trade plantations and immorality, and of the excellency and divinity of inward light, London, 1699.

A vindication of some assertions relating to coin and trade, from the reflections made by the author of the Essay on ways and means, in his book, intituled, discourses on the publick revenues, and on the trade of England, etc., Pt. II, London, 1699.

P., J. Of trade I–20 .. also, of coyn, bullion, of improving our woolen manufacture, London, 1700.

[North, Dudley] Considerations upon the East-India trade, London, 1701.

Chomel, M. Noel. *ed.* Dictionnaire oeconomique, contenant divers moyens d'augmenter son bien, tome 1–2, Paris, 1718, 2 tomes.

Law, Mr. Considérations sur le commerce et sur l'argent, tr. de l'Anglois, A La Haye, 1720.

Vanderlint, Jacob. Money answers all things: or, An Essay to make money sufficiently, London, 1734.

Quesnay, François. Essai phisique sur l'oeconomie animale, Paris, 1736.

Temple, William. 5. The works of Sir William Temple, Bart, In two vols., London, 1740. 2 vols.

[Law, John] Money and trade considered: with a proposal for supplying the nation with money first published at Edinburgh 1705, Glasgow, 1750.

Fleetwood, Bishop. Chronicon preciosum: or, An Account of English gold and silver money, London, 1745.
Della moneta libri cinque, Napoli, 1750.

Law, John. Proposals and reasons for constituting a council of trade in Scotland, Glasgow, 1751.

Postlethwayt, M. The universal dictionary of trade and commerce, translated from the French of the celebrated Monsieur Savary .. additions and improvements, .. trade and navigation of these Kingdoms and the laws, customs, by Malachy Postlethwayt, esq. Vol. I–II, London, 1751, 2 vols.

[Tucker, Josiah] Reflections on the expediency of opening the trade to Turkey, London, 1753.

[Mirabeau, et Quesnay] L'Ami des hommes, ou Traité de la population. Tome 1–2. Paris, 1756, 2 tomes.
Great Britain's true system, London, 1757.

Tableau oeconomique avec ses explications, Paris, 1760.
The case of going to war, for the sake of procuring, enlarging, or securing of trade, London, 1763.
Philosophie rurale, ou économie générale et politique de l'agriculture, Tome 1–3, Amsterdam, 1764.
A discourse upon grants and resumptions. Showing how our ancestors have proceded with such ministers .. by the author of, the Essay on ways and means, 2 ed., London, 1770.

Mirabeau, M. Système de la nature, ou les lois de monde physique, Londres, 1770.

[Galia] Dialogues sur le commerce des blés, Londres, 1770.

Smith, Adam. An inquiry into the nature and causes of the wealth of nations, In two vols., London, 1776, 2 vols.

Tucker, Josiah. Four tracts, on political and commercial subjects, 3 ed., Glocester, 1776.

Smith, Adam. An inquiry into the nature and causes of the wealth of nations, 2 ed., In two vols., London, 1778, 2 vols.

Necker, M. De l'administration des finances de la France, Tome 1–3, 1784, 3 tomes.

Turgot, de M. Oeuvres posthumes de M. Turgot, Lausane, 1787.

D., A. Proposals to supply His Majesty with twelve or fourteen millions of money .. for the year 1697 without subscriptions or advancing present taxes, London, 1797.
The universal dictionary of trade and commerce: with large additions and improvements adapting the same to the present state of British affairs in America, Vol. 1–3, 4 ed., London, 1774. 2 vols.

5. 第7回大会（一橋大学）の展示目録 （排列：出版年代順）

A. メンガーの著書・論文

1. Menger, Carl. Grundsätze der Volkswirtschaftslehre, 1. Allgemeiner Teil. Wien, 1871, XII, 285 S.
2. Menger, Carl. Allgemeine theoretische Wirtschaftslehre, Wien, 1871, XII, 285 S. [著者が Grundsätze der Volks-

wirtschaftslehre を改題し訂正増補の上刊行せんと試みしものの如し，書込甚だ多し]

3. Menger, Carl. Untersuchungen über die Methode der Sozialwissenschaften, und der politischen Oekonomie insbesondere, Leipzig, 1883, XXXII, 291 S.

4. Menger, Carl. Die Irrthümer des Historismus in der deutschen Nationalökonomie, Wien, 1884, X, 87 S.

5. Menger, Carl. Zur Kritik der politischen Oekonomie, Wien, 1887, 31 S. (*Separatabdruck* Zeitschrift für das Privat- und öffentliche Recht der Gegenwart, Bd. 14.)

6. Menger, Carl. Zur Theorie des Kapitals, (Jahrbücher für Nationalökonomie und Statistik, N. F., Bd. 17, S. 1–49, Jena, 1888.)

7. Menger, Carl. Geld, Jena, 1909, 56 S. (*Separatabdruck* Handwörterbuch der Staatswissenschaften, 3. Aufl., Bd. 4.)

8. Menger, Carl. The collected works, Vol. 1–4, London, 1933–36, 4 vols. (London school of economics and political science, Series of reprints of scarce works on political economy, No. 17–20.)
   Vol. I. Grundsätze der Volkswirtschaftslehre, 1. Tl., Wien, 1871, Repr. 1934. [附 F. A. von Hayek のメンガー伝]
   Vol. II. Untersuchungen über die Methode der Sozialwissenschaften, und der politischen Oekonomie, Leipzig, 1883, Repr. 1933.
   Vol. III. Kleinere Schriften zur Methode und Geschichte der Volkswirtschaftslehre, Repr. 1935.
   Vol. IV. Schriften über Geldtheorie und Währungspolitik, (1889–1909), Repr. 1936.

B. メンガー文庫

9. Aegidius Columna s. de Roma: de regimine principum libri III. [Augsburg G. Zainer. 1473.]

10. Biel. Gabr. (1430–1495.) Tractatus de potestate et utilitate monetarum, 12 p.

11. Luther, Martinus. Vom Wucher und widerteufflichen Zinsen, [ca. 1524.] 22 S.

12. Straccha, B. Tractatus de mercantura, seu mercatore, Lugdunum, 1558.

13. Latimer. Latimer's sermons, Lond., 1575.

14. Bodin, J. Les six livres de la république, Paris, 1577.

15. Malestroict, de. Les paradoxes, Paris, 1578.

16. Paruta, P. Della perfettione della vita politica, Venetia, 1582.

17. Scaruffi, Gasparo. L'alitinonfo per fare ragione, et concordanza d'oro, e d'argento; che servira in universale, etc. Reggio, 1582, 77 p.

18. Guicciardini, Francesco, &c. Propositioni, overo considerationi in materia di cose di stato, sotto titolo di avvertimenti, avvedimenti civili, & concetti politici, Vinegia, 1583.

19. Bodinus, Joann. De republica libri sex, latine ab authore redditi, multo quam antea locupletiores. Et nunc hac secunda editione ex authoris autographo recogniti, multisque mendis que partim in contextum, partim in legum adnotationes ad marginem apositas, in priore editione irrepserant, repurgati, 1591.

20. Machiavelli, Nicolai. De republica, quas discursus nuncupavit. Libri III. Quomodo in rebuspub. ad antiquorum Romanorum imitationem actiones omnes bene maléve instituantur. Ex Italico Latini facti. Mompelgarti, 1599.

21. M[un], T. A discourse of trade. Lond., 1621, 56 p.

22. Seckendorff, Veit Ludwig v. Teutscher Fürsten Stat. oder: Gründliche und kurtze Beschreibung, welcher gestalt Fürstenthümer, Graff- und Herrschaften im H. Römischen Reich Teutscher Nation, &c. Hanaw., 1656.

23. Boxhornius, Marci Zuerii. Varii tratatus politici, Amsteldamum, 1663.

24. Becker, Joan Caspar. Dissertatio de praecipuis negotiis in comitiis imperii Germanici olim et hodienum tractari solitis. Praesidio H. Conringii, Helmaestandium, 1666, 70 p.

25. Becher, Johann Joachim. Politischer Discurs von den eigentlichen Ursachen dess Auf- und Abnehmens, der Städt, Länder und Republicken, &c., Frankf., 1668.

26. C[hild], J. Brief observations concerning trade, and interest of money. Lond., 1668, 20 p.

27. [Horneck, Anthony.] Oesterreich über alles wann es nur will. Das ist: Wohlmeinender Fürschlag wie mittelst einer wolbestellten Lands-Oeconomie, die Kayserliche Erbland in kurzem über alle andere Staat von Europa zu erheben, &c., 1685.

28. [North, D.] Discourses upon trade, Lond., 1691, 28 p.

29. Colbert, Jean-Baptiste. Testament politique de Messire Jean-Baptiste Colbert, ministre et secrétaire d'Etat, La Have, 1694.

30. Petty, William. Several essays in political arithmetick, Lond., 1699.

31. Pufendorf, Samuel. De jure naturae et gentium libri octo, cum annotatis Joannis Nicolaihertii. Editio nova. Francofurtum a. M., 1706.

32. Vauban, de. Projet d'une dixme royale, 1707.

33. King, Charles. The British merchant; or, commerce preserv'd. Lond., 1721, 3 vols.

34. Grotius, Hugo. De jure belli ac pacis libri tres, in quibus jus naturae et gentium, item juris publici praecipua explicantur. Cum annotatis auctoris, ejusdemque dissertatione de Mari Libero, ac libello singulari de aequitate, indulgentia, et facilitate, etc. Amstelaedamum, 1735, 2 vols.

35. [Melon, J. F.] Essai politique sur le commerce, 1736.

36. [Cantillon, R.] Essai sur la nature du commerce en général, Tr. de l'anglois. Lond., 1755.

37. [Mirabeau.] L'ami des hommes, ou traité de la population, Avignon, 1756, 2 vols.

38. Justi, Johann Heinrich Gottlob v. Der Grundriss einer guten Regierung, Frankf. u. Leipzig, 1759.

39. [Mirabeau.] Philosophie rurale, ou économie générale et politique de l'agriculture, Amsterdam, 1763.

40. Ephémérides du citoyen, 1767–1772, Paris, 21 vols.

41. Sonnenfels, Jesephs von. Grundsätze der Polizey, Handlung und Finanzwissenschaft, 1.–3. Aufl., Wien, 1770–76, 3 Bde.

42. [Necker, Jacques.] Eloge de Jean-Baptiste Colbert, discours qui a remporté le prix de l'Académie françoise, en 1773, Paris, 1773.

43. [Turgot, Anne Robert Jacques.] Untersuchung über die Natur und den Ursprung der Reichthümer und ihrer Vertheilung unter den verschiedenen Gliedern der bürgerlichen Gesellschaft, Aus dem Französischen übers, Lemgo, 1775. 136 S.

44. Condillac, *l'abbé* de. Le commerce et le governement, Amsterdam & Paris, 1776.

45. Smith, Adam. An inquiry into the nature and causes of the wealth of nations, Lond., 1776, 2 vols.

46. Möser, Justus. Patriotische Phantasien. Hrsg. von seiner Tochter J. W. J. v. Voigt, Tl. 1–3, Neue verb. und verm. Aufl., Berl., 1778, 3 Bde.

47. Turgot, [A. R. J.] Réflexions sur la formation et la distribution des richesses, 1788, 136 p.

48. Wagner, Ad. Theoretische Sozialökonomik, Abtl. 2, Bd. II, 1909.

C. そ の 他

49. メンガー文庫引受にあたりし人々（於ウィーン，メンガー宅）大塚金之助教授，メンガー夫人，金子鷹之助元教授，渡辺大輔元教授

50. デス・マスク

51. メンガーがたずさえた図書蒐集用のノート

6. 第17回大会（立教大学）の展示目録

重農学派古版本展示目録

QUESNAY, FRANÇOIS

Essai physique sur l'oeconomie animale, Paris, 1736. (tome 1.)
Essai physique sur l'oeconomie anilame, 2me éd., Paris, 3 tomes, 1747.
Memoires de l'académie royale de chirurgie, 2 tomes, 1753.
Recherches critiques et historiques sur l'origine, sur les divers états et sur les progrés de la chirurgie en France, Paris, 1744.
Traité des effets et de l'usage de la saignée, Paris, 1750.
Traité des fièvres continues, Paris, 2 tomes, 1753.
Oeuvres économiques et philosophiques, par A. Oncken, Frankf. s. M., 1888.
Tableau économique, First printed in 1758 and now produced in facsimile for the British Economic Association, London, 1894.
Weulersse, G.: - Les manuscrits de Quesnay et Mirabeau aux Archives Nationales.

*　　*　　*　　*

DUPONT DE NEMOURS

(éd.) La Physiocratie ou constitution naturelle du gouvernement le plus avantageux au genre humain. Recueil des traités de Quesnay, 2 tomes, Paris, 1768, (tome 1er.).

*　　*　　*　　*

MIRABEAU, M. de

La nouvelle distinction des orders.
Précis de l'organisation, ou mémoire sur les états provinciaux, Avignon, 1759.
Théorie de l'impôt, (Paris), 1760.
Théorie de l'impôt, Avignon, 1761.

Supplément à la théorie de l'impôt, La Haye, 1776.
Philosophie rurale, ou économie générale et politique de l'agriculture, Amst., 1763.
Philosophie rurale ou économie générale et politique de l'agriculture, Amsterdam, 3 tomes, 1764.
Eléments de la philosophie rurale, La Haye, 1767.
Landwirtschaftsphilosophie, oder politische Oekonomie der gesamten Land- u. Staatswirtschaft, 2 Bde., Liegnitz u. Leip., 1797–98.

* * * *

L'ami des hommes, ou traité de la population, Avignon, 3 tomes, 1756.
L'ami des hommes, ou traité de la population, nouvelle éd., augmentée d'une quatriéme partie et sommaires, 1758.
L'ami des hommes, ou traité de la population, nouvelle éd., augmentée d'une quatriéme partie et sommaires, 6 tomes, 1758–60.
L'ami des hommes, ou traité de la population, 5me éd., Hamb., 8 pts. in 7 v., 1760.
L'ami des hommes, ou traité de la population, 8 tomes, s. 1. (?), 1762–64.

附録Ⅲ　現在の会則、会員、役員、事務局

一　会　則

名　称

第一条　本会は経済学史学会と称する。

目　的

第二条　本会の目的は次の通りである。

一　経済学史、社会・経済思想史の研究

二　内外の学界との交流

事　業

第三条　本会は前条の目的を達するために次の事業を行う。

一　研究報告会の開催

イ　毎年一回適当の地及び時に全国大会を開く

必要に応じて臨時の大会を開くことがある

ロ　別に定めるところによって地方部会を開くことができる

二　公開講演会の開催

三　内外の経済諸学会との連絡
四　機関誌の発行
五　その他本会の目的を達するために必要な事業

会　員

第四条　本会は経済学史、社会・経済思想史の研究者をもって組織する。

第五条　本会に入会しようとする者は会員二名の紹介により常任幹事に申込み総会の承認を受けなければならない。

第六条　会員は会費として毎年四月（五月以後に入会した者は入会の時）に参百円を納めなければならない。

第七条　会員は機関誌の実費配布をうける。

第八条　会員は書面により常任幹事に通告すれば退会することができる。

顧　問

第九条　会員であって多年経済学史学の発達に貢献のあったものは幹事会の推薦により総会の承認を経て顧問とすることができる。

役　員

第十条　会務を処理するために幹事若干名を置く。

第十一条　幹事は会員総会において会員中より選挙する。

第十二条　幹事の任期は二カ年とする。但し重任を妨げない。

第十三条　本会の常務を処理するために幹事中より常任幹事若干名を互選する。

第十四条　常任幹事の中一名を本会の代表者とし代表幹事と称する。

第十五条　本会に監事二名を置く。

監事の選出については第十一条を準用する。

監事の任期については第十二条を準用する。

総　会

第十六条　本会は毎年一回会員総会を開く。

幹事会が必要と認める時又は会員の三分の二以上の請求がある時は臨時総会を開く。

第十七条　幹事会は総会の議事、会場及び時期を定め予めこれを会員に通知する。

第十八条　常任幹事は総会において会務及び会計の報告をする。

第十九条　総会における議長はその都度会員中より選挙する。

第二十条　総会における決定は本会則において特に定めてある場合のほか出席会員の過半数による。可否同数の場合は議長がこれを決定する。

会則の変更及び本会の解散

第二十一条　本会則の変更又は本会の解散は幹事の過半数又は会員十五名以上の提案により総会出席会員三分

の二以上の賛成を得なければならない。

会計期間

第二十二条　本会の会計期間は毎年四月一日より翌年三月三十一日までとする。

附　則

第二十三条　幹事の中二名を日本経済学会連合の評議員とし会員総会においてこれを決定する。但し緊急已むを得ない場合はこの限りではない。

第二十四条　本会の事務所は当分の間、関西学院大学経済学部内に置く。

二　会　員

経済学史学会会員名簿（ＡＢＣ順）―一九六〇年末現在―

氏名	所属
A	
阿部真也	九州大学経済学部大学院
阿部志郎	明治学院大学文学部
相見志郎	同志社大学経済学部
相沢秀一	大阪市立大学経済学部
赤羽豊治郎	信州大学文理学部
赤倉　武	明治大学政経学部
安藤英治	成蹊大学政治経済学部
荒巻正憲	熊本商科大学
荒巻哲郎	鹿児島大学文理学部
有馬文雄	横浜市立大学商学部
有田一郎	熊本大学教育学部
有田　稔	関西大学経済学部
浅羽二郎	武蔵大学経済学部
浅野栄一	中央大学
遊部久蔵	慶応義塾大学経済学部
淡路憲治	富山大学経済学部
東晋太郎	関西学院大学経済学部
B	
馬場啓之助	一橋大学経済学部
馬場元二	久留米大学商学部
朴庸坤	朝鮮大学
C	
張光夫	関西学院大学社会学部
長守善	中央大学経済学部
D	
大道安次郎	関西学院大学社会学部
大門一樹	関東学院大学経済学部
伊達邦春	早稲田大学政治経済学部
出口勇蔵	京都大学経済学部
E	
蛯原良一	新潟大学人文学部
衛藤綾子	法政大学経済学部
江原又七郎	宇都宮大学学芸学部
江沢譲爾	専修大学商経学部
F	
藤井定義	大阪府立大学経済学部
藤本保太	山口大学教育学部防府分校

藤岡孝四郎　大阪大学（北校）
藤田暁男　九州大学大学院
藤田勝次郎　函館商科短期大学
藤塚知義　武蔵大学経済学部
深町郁弥　九州大学経済学部
吹春寛一　九州大学大学院
福田豊　九州大学大学院
福原行三　大阪府立大学経済学部
麓健一　中央大学商学部
古川哲　法政大学経済学部
古川武　大阪商業大学商経学部
古沢友吉　横浜市立大学商学部

G

五井一雄　中央大学経済学部
五島茂　東京外国語大学

H

芳賀守　福島第二高等学校
浜林正夫　小樽商科大学
浜田清夫　京都大学経済学部
浜崎正規　立命館大学経済学部
花井益一　富山大学経済学部
原薫　法政大学大原社会問題研究所
原司郎　神奈川大学法経学部
原田三喜雄　西南学院大学商学部
狭田喜義　広島大学政経学部
長谷川幸生　中央大学経済学部
橋本比登志　関西学院大学大学院
橋本純二　徳島大学学芸学部
畑孝一　一橋大学大学院
羽鳥卓也　福島大学経済学部
服部成三郎　慶応義塾大学経済学部
早川三代治　早稲田大学教育学部
早瀬利雄　横浜市立大学商学部
林治一　神戸大学経済学部
林直道　大阪市立大学経済研究所
林登良雄　竜谷大学
迫間真次郎　日本大学経済学部
日高普　法政大学経済学部
平館利雄　横浜国立大学経済学部
平井新　慶応義塾大学経済学部
平井俊彦　京都大学経済学部
平山宣道　明治学院大学経済学部

平尾　敏　愛知大学法経学部
平瀬巳之吉　明治大学政経学部
平田喜久雄　福岡大学法経学部
平田清明　名古屋大学経済学部
広田　純　立教大学経済学部
広田司朗　関西大学商学部
菱山　泉　京都大学経済学部
本田獅子太郎　明治大学政経学部
本位田祥男　明治大学政治経済学部
本間要一郎　横浜国立大学学芸学部
堀　普作　国学院大学経済学部
堀　経夫　関西学院大学経済学部
堀江正男　秋田大学学芸学部
堀江忠男　早稲田大学政治経済学部
堀川マリ子　中央大学経済学部
堀家文吉郎　早稲田大学政治経済学部
細見　英　立命館大学経済学部
市原亮平　関西大学経済学部
一泉知永　明治大学商学部
一杉哲也　横浜市立大学商学部

井手文雄　横浜国立大学経済学部
井手口一夫　福岡大学経済学部
伊原光之助　竜谷大学経済学研究所
飯田　鼎　慶応義塾大学経済学部
飯塚一郎　山梨大学学芸学部
池田一浩　佐賀大学教育学部
池田一新　明治大学政経学部
池田浩太郎　成城大学経済学部
井汲卓一　東京経済大学
今井光太郎　東洋大学経済学部
今西正雄　同志社大学経済学部
井村喜代子　慶応義塾大学経済学部
井上次郎　立命館大学経済学部
井上周八　立教大学経済学部
犬伏宣宏　甲南学園
入江　奨　松山商科大学
伊坂市助　関東学院大学経済学部
石垣博美　北海道大学経済学部
石原忠男　中央大学商学部
石川郁男　茨城大学文理学部

石川興二　京都学芸大学
石川正一　東京都立商科短期大学
伊島定夫　早稲田大学政治経済学部大学院
石坂巌　慶応義塾大学経済学部
石津英雄　香川大学経済学部
磯部浩一　明治学院大学経済学部
井藤半弥　一橋大学経済学部・青山学院大学
伊東正則　福岡大学経済学部
伊東光晴　東京外国語大学
伊東史朗　同志社大学経済学部
岩松繁俊　長崎大学経済学部
岩根典夫　西南学院大学商学部
岩野茂道　九州大学大学院

J

城座和夫　都立大学経済学部
加田哲二　日本大学経済学部

K

門屋英二　愛知大学法経学部
戒田郁夫　関西大学経済学部
海道勝稔　富山大学経済学部
梯明秀　立命館大学経済学部
蒲地俊朗　一橋大学

鎌田武治　横浜国立大学経済学部
金井信一郎　明治学院大学経済学部
金田重喜　京都大学経済学部
金子甫　九州大学大学院
金子ハルオ　東京都立大学法経学部
金子敬生　神戸大学
樫原敬三　熊本商科大学
柏尾昌哉　関西大学商学部
柏崎利之輔　早稲田大学政治経済学部
加藤一夫　秋田大学学芸学部
加藤隆　明治大学政経学部
加藤泰男　明治大学政経学部
勝部邦夫　島根大学教育学部
川口慎二　大阪大学経済学部
川口武彦　九州大学
川尻武　中央大学商学部
川鍋正敏　立教大学経済学部
川崎文治　長崎大学経済学部
川崎隆司　一橋大学
川島信義　九州大学大学院経済学研究科

河口　宏　明治大学大学院
河本博介　長崎大学経済学部
河野健二　京都大学人文科学研究所
気賀健三　慶応義塾大学経済学部
木村正身　香川大学経済学部
木村元一　一橋大学経済学部
木村健康　東京大学経済学部
木村雄二郎　関西大学経済学部
喜里山博之　四天王寺女子短期大学
岸田　理　愛知学院大学商学部
岸本誠二郎　京都大学経済学部
喜多　登　明治大学経済学部
北古賀勝幸　熊本商科大学
北見俊郎　関東学院大学経済学部
北村正次　早稲田大学商学部
北沢新次郎　東京経済大学
小林謙三　早稲田大学博士課程（生産研究所）
小林賢斉　武蔵大学経済学部
小林昇　立教大学経済学部
小林巧　日本大学経済学部

児玉　亮　明治大学大学院政治経済学研究科
児玉洋一　香川大学経済学部
古賀英三郎　一橋大学社会学部
小池基之　慶応義塾大学経済学部
小松憲治　早稲田大学大学院経済学研究科
小松雅雄　早稲田大学政治経済学部
小松芳喬　早稲田大学政治経済学部
河野　稔　関西大学商学部
河野善隆　長崎県立短期大学佐世保分校
越村信三郎　横浜国立大学経済学部
小谷義次　大阪市立大学経済学部
久保芳和　関西学院大学経済学部
久保田明光　早稲田大学政治経済学部
久保田　順　関東学院大学経済学部
工藤英一　明治大学経済学部
工藤良平　弘前大学文理学部
熊谷一男　一橋大学大学院
黒川俊雄　慶応義塾大学経済学部
久留間鮫造　法政大学大原社会問題研究所
久留島京子　岡山栄養短期大学

久留島陽三　岡山大学法文学部
繰生正男　大分大学経済学部
楠井隆三　関西学院大学経済学部
M
前田豊昭　長崎大学学芸学部
舞出長五郎　学習院大学政経学部
丸田永作　香川大学経済学部
丸山広一　立教大学大学院
正木一夫　名古屋大学
松原藤由　関西大学経済学部
松田緝　久留米大学商学部
松田寛　早稲田大学教育学部
松田勇　大阪市青少年問題協議会
松田弘三　立命館大学経済学部
松田智雄　東京大学経済学部
松枝寅男　香川大学経済学部
松井安信　西南学院大学商学部
松川七郎　一橋大学経済研究所
松隈芳男　佐賀大学文理学部
松尾博　滋賀大学経済学部
松岡寛爾　名城大学法商学部

松岡保　京都大学人文科学研究所
松浦要　中央大学商学部
松浦高嶺　立教大学文学部
松山昌司　南山大学経済学部
真実一男　大阪市立大学経済学部
三上正之　中京大学商学部
三神俊信　明治大学経済学部
三辺信夫　大阪市立大学経済学部
三辺清一郎　桃山学院大学経済学部
南方寛一　神戸大学経済学部
南克己　神奈川大学法経学部
南亮三郎　中央大学経済学部
見野貞夫　神戸大学大学院経済学研究科
三瀬真　明治大学経営学部
三谷友吉　関西大学経済学部
宮川実
宮川武雄　神奈川大学法経学部
三宅鹿之助　東洋大学経済学部
三宅義夫　立教大学経済学部
宮本憲一　金沢大学法文学部

宮本義男　和歌山大学経済学部
宮鍋幟　一橋大学経済研究所
宮内博　大阪商業大学
宮崎喜代司　九州大学大学院経済学研究科
宮崎犀一　国学院大学政経学部
宮崎義一　横浜国立大学経済学部
溝川喜一　甲南大学経済学部
水田博　国学院大学政経学部
水田洋　名古屋大学経済学部
水田珠枝　名古屋大学法学部
持丸悦朗　慶応義塾大学経済学部
望月通　一橋大学大学院社会学研究科
森耕二郎　九州大学経済学部
森茂也　南山大学社会科学部
森静朗　日本大学大学院
森垣淑　拓殖大学
森川喜美雄　専修大学大学院経済学研究科
森田勉　三重大学学芸学部
守本順一郎　名古屋大学法学部
守谷基明　関西大学経済学部

守屋典郎　神奈川県立高浜高等学校
守屋英夫　福岡大学法経学部
本吉敬治　明治大学大学院政経学研究科
向山茂　埼玉大学文理学部
村川秀雄　慶応義塾大学大学院経済学研究科
村田光義　神戸商科大学
村田安雄　中央大学経済学部
武藤光朗　横浜国立大学経済学部
武藤正平　福岡大学経済学部

N

長岡豊　東京教育大学文学部
長坂聰　横浜国立大学経済学部
長洲一二　名古屋大学経済学部
永井義雄　滋賀大学学芸学部
永岡薫　上智大学経済学部
永沢越郎　明治大学政経学部
永田正　京都大学経済学部
永友育雄　同志社大学経済学部
中島哲人　成城大学経済学部
中村英雄　大分大学経済学部
中村広治

中村一雄	神戸大学経済学部
中村賢一郎	明治大学政経学部
中村金治	東京経済大学
中村幸太郎	大阪女子大学
中村瑞穂	慶応義塾大学大学院経済学研究科
中村貞二	山口大学経済学部
中村雄二郎	久留米大学商学部
中野正	法政大学経済学部
中里皓年	神戸大学大学院経済学研究科
中山大	甲南大学経済学部
中沢慶之助	西南学院大学商学部
縄田栄次郎	関西学院大学経済学部
二瓶敏	東京大学大学院社会科学研究科
西太郎	佐賀大学教育学部
西川清治	大阪市立大学経済学部
西川良一	同志社大学経済学部
西村豁通	同志社大学経済学部
西村孝夫	大阪府立大学経済学部
西山久徳	明治大学大学院政経学研究科
野地洋行	慶応義塾大学経済学部
野尻武敏	神戸大学経済学部
野本千秋	日本大学大学院
野々村一雄	一橋大学経済研究所
縫田清二	横浜国立大学経済学部
O大淵利男	日本大学法学部
尾形憲	法政大学経済学部
岡茂男	武蔵大学経済学部
岡田統一	聖心女子大学
岡田実	中央大学経済学部
岡田俊平	成城大学経済学部
岡橋保	九州大学経済学部
岡本博之	大阪市立大学経済学部
岡村邦輔	日本大学商学部
岡野鑑記	神奈川大学法経学部
岡崎次郎	法政大学経済学部
岡崎栄松	立命館大学経済学部
岡山隆	早稲田大学政治経済学部
桶舎典男	一橋大学
奥沢篤次郎	法政大学経済学部
大泉行雄	香川大学経済学部

大川政三　一橋大学経済学部
大木啓次　宇都宮大学学芸学部
大河内一男　東京大学経済学部
大熊信行　神奈川大学法経学部・富山大学
大前朔郎　関西学院大学経済学部
近江谷幸一　日本大学経済学部
大井正　明治大学経済学部
大久保嘉三　岡山商科短期大学
大野精三郎　一橋大学経済研究所
大野信三　明治大学商学部
大野勇一郎　北海道学芸大学
大沼健吉　日本大学経済学部
小野高治　同志社大学経済学部
小野重雄　神奈川大学法経学部
小野俊夫　早稲田大学政治経済学部
長田五郎　横浜市立大学経済研究所
逢坂充　九州大学大学院経済学研究科
大島清　法政大学経済学部
大島清　東京教育大学文学部
大島通義　慶応義塾大学経済学部
大島雄一　名古屋大学経済学部
大塚金之助　一橋大学名誉教授
大塚健太郎　早稲田大学大学院経済学研究科
大内秀明　明治学院大学経済学部

R

良知力　法政大学経済学部

S

斉藤博　国学院大学政経学部
斉藤正三　日本大学大学院経済学研究科
酒枝義旗　早稲田大学政経学部
坂本市郎　中央大学商学部
坂本慶一　京都大学農学部
坂田太郎　一橋大学社会学部
向坂逸郎　九州大学経済学部
桜井毅　東京大学大学院社会科学研究科
佐々木晃　日本大学経済学部
佐々木専三郎　茨城大学文理学部
佐藤武男　東京学芸大学経済科
佐藤豊三郎　横浜市立大学商学部
佐藤康正　熊本商科大学
沢村栄治　大阪外国語大学
逆井孝仁　立教大学経済学部

関　未代策　明治大学政経学部
関口甲子男　亜細亜大学
仙田左千夫　京都大学経済学部
瀬尾芙巳子　関西大学商学部
渋谷一郎　明治学院大学経済学部
渋谷行雄　早稲田大学政経学部
重松通直　大分大学経済学部
重田晃一　関西大学経済学部
椎名良吉　東京都立商科短期大学
島田千秋　明治大学大学院政治経済学研究科
島崎晴哉　中央大学経済学部
島崎美代子　上野学園大学
島崎隆夫　慶応義塾大学経済学部
島津亮二　京都大学経済学部
清水哲之　明治大学政治経済学部
清水貞俊　立命館大学経済学部
清水忠直　関東学院大学経済学部
清水嘉治　関東学院大学経済学部
清水川繁雄　明治大学政経学部
新川士郎　北海道大学経済学部

白井　厚　慶応義塾大学経済学部
白杉庄一郎　立命館大学経済学部
正田庄次郎　慶応義塾大学大学院経済学研究科
副田満輝　九州大学経済学部
末永茂喜　東北大学経済学部
須賀俊夫　愛媛大学教育学部
杉原四郎　関西大学経済学部
杉本俊朗　横浜国立大学経済学部
杉山忠平　静岡大学文理学部
杉山俊治　南山大学社会科学部
住谷悦治　同志社大学経済学部
住谷一彦　立教大学経済学部
須藤直吉　秋田大学学芸学部
諏訪貞夫　早稲田大学大学院経済学研究科
鈴木圭介　東京大学社会科学研究所
鈴木喜久夫　埼玉大学文理学部
鈴木鴻一郎　東京大学経済学部
鈴木純博　一橋大学
T立入広太郎　立教大学経済学部
多田顕　千葉大学文理学部

高垣寅次郎　一橋大学名誉教授
高木幸二郎　九州大学経済学部
高木正雄　神戸商科大学
高木暢哉　九州大学経済学部
高木真助　山口大学経済学部
高橋久弥　九州大学大学院
高橋正立　京都大学大学院
高橋良三　立命館大学経済学部
高橋誠一郎　慶応義塾大学経済学部
高村象平　慶応義塾大学経済学部
高野利治　関東学院大学経済学部
高瀬浄　東京都立航空工業短期大学
高島善哉　一橋大学社会学部
高島光郎　横浜国立大学経済学部
高山満　東京経済大学
武田正二　中央大学経済学部
武野秀樹　九州大学経済学部
竹村脩一　大分大学経済学部
玉野井芳郎　東京大学教養学部
玉井竜象　桃山学院大学産業貿易研究所

田村秀夫　中央大学経済学部
田村米三郎　大阪女子大学
田村喜照
田中敏弘　関西学院大学経済学部
田中菊次　東北大学経済学部
田中駒男　早稲田大学政経学部
田中正司　横浜市立大学商学部
田中真晴　京都大学経済学部
田中充　関西大学経済学部
田代正夫　法政大学社会学部
種瀬茂　一橋大学経済学部
建林正喜　広島大学工学部
楯岡重行　福岡大学商学部
田添京二　福島大学経済学部
寺園徳一郎　福岡大学経済学部
戸田正雄　日本大学経済学部
戸田武雄　静岡大学文理学部
戸原四郎　東京大学社会科学研究所
時永淑　法政大学経済学部
常盤政治　慶応義塾大学経済学部

徳増栄太郎	横浜国立大学経済学部
東井正美	関西大学経済学部
遠山馨	西南学院大学商学部
富塚良三	福島大学経済学部
渡植彦太郎	神奈川大学経済学部
豊川卓二	静岡大学文理学部
豊倉三子雄	関西学院大学経済学部
津田内匠	一橋大学経済研究所
塚谷晃弘	国学院大学政経学部
都野尚典	九州大学大学院
角山栄	和歌山大学経済学部
筒井清彦	大分大学経済学部
筒井徹	東北学院大学文経学部
都築忠七	一橋大学
鼓肇雄	名古屋大学経済学部
U 内田義彦	専修大学商経学部
宇高基輔	東京大学社会科学研究所
宇高豪	大阪府商工経済研究所
上原一男	早稲田大学大学院経済学研究科
植村省三	立命館大学経済学部
上野格	一橋大学大学院
宇治田富造	立教大学法経学部
梅田政勝	福岡大学経済学部
梅谷泰夫	慶応義塾大学経済学部
梅津和郎	大阪外国語大学
宇佐美誠次郎	法政大学経済学部
牛田純夫	早稲田大学大学院経済学研究科
宇津木正	一橋大学経済研究所
W 和田貞夫	大阪府立大学経済学部
和田重司	一橋大学
渡辺昭	東京大学社会科学研究所
渡辺源次郎	福島大学経済学部
渡辺輝雄	東京経済大学
渡辺渡	東京経済大学
渡辺寛	法政大学経済学部
渡辺建	相鉄不動産株式会社
渡辺富作	福岡学芸大学
渡辺和一郎	慶応義塾大学大学院経済学研究科
渡辺恭彦	一橋大学大学院
Y 八木助市	神戸大学経済学部

柳下　勇　横浜市立大学商学部
矢口孝次郎　関西大学経済学部
矢島悦太郎　中央大学経済学部
矢島釣次　東京学芸大学世田谷分校
山田秀雄　一橋大学経済研究所
山田耕之介　立教大学経済学部
山田長夫　横浜市立大学商学部
山田盛太郎　専修大学商経学部
山田雄三　一橋大学経済学部
山県一雄　日本大学経済学部
山川義雄　早稲田大学政経学部
山本二三丸　立教大学経済学部
山村延昭　九州大学経済学部
山中隆次　和歌山大学経済学部
山下博　同志社大学経済学部
山口和男　甲南大学経済学部
山崎怜　香川大学経済学部
山崎義三郎　神戸大学経済学部
安田文一郎　早稲田大学大学院経済学研究科
保田順三郎　早稲田大学政経学部

余田博通　関西学院大学社会学部
横溝軌一　西南学院大学商学部
横山正彦　東京大学経済学部
吉田啓一　慶応義塾大学経済学部
吉田静一　関西大学経済学部
吉田茂芳　竜谷大学
吉田洋一　専修大学商経学部
吉田義三　大阪市立大学経済学部
吉原泰助　東京大学大学院
吉村二郎　愛知学院大学商学部
吉岡健次　大阪経済大学
吉沢芳樹　専修大学商経学部
行沢健三　関西学院大学経済学部

三　役　員（昭和三十五年十二月末現在）

（顧　問）　高橋誠一郎

（代表幹事）　堀　経夫

（幹　事）　（○印　常任幹事）

○遊部久蔵　大道安次郎　出口勇蔵　狭田喜義

平瀬巳之吉　○堀　経夫　○岸本誠二郎　○小林　昇

○越村信三郎　○久保田明光　水田　洋　長洲一二

大塚金之助　白杉庄一郎　末永茂喜　杉原四郎

高木暢哉　内田義彦　山川義雄　○横山正彦

（監　事）　関　未代策　徳増栄太郎

（日本経済学会連合評議員）　久保田幹事　越村幹事

（経済学研究連絡委員会委員）　大塚幹事

四　事務局

西宮市上ケ原　関西学院大学経済学部内　（電話）　西宮(5)　○九一二（代表）

（振替）　東京　八三〇〇七

（事務責任者）　久保芳和

昭和三十六年五月五日　印刷
昭和三十六年五月十日　発行

日本における経済学史研究十年の歩み

頒価　三二〇円

著作者　経済学史学会

発行者　経済学史学会十年史刊行会
堀　経夫

印刷者　京都市左京区北白川追分町一
出浦　栄

発行所　西宮市上ヶ原関西学院大学経済学部内
経済学史学会十年史刊行会